

赤松智城論ノオト

— 徳応寺所蔵資料を中心に —

菊 地 暁

1. 植民地 / 人類学研究のセカンド・ステージ

日本における植民地 / 人類学の研究はセカンド・ステージに突入したといっただろう。欧米人類学のトピック直輸入によって始められた日本における植民地 / 人類学の研究は、当初、「大日本帝国」に関わる研究をアンバランスなまでに欠き、あるいはそれがなされたとしても「オリエンタリストの日本人研究者 / 文化的抵抗を試みる植民地研究者」といった安易な二項対立に基づくイデオロギー的裁断の域を出ないものが少なくなかった¹⁾。だが、近年、研究状況は新たな段階を迎えつつあるように感じられる。

安易なステレオタイプやレッテル貼りを回避すること。個々の研究者の発話や実践を具体的な文脈から検証し、そこに生起する複雑な政治性を補足し、その可能性と限界性を見極めること。そのための作業が着実に蓄積されつつある。戦前・戦中における「大日本帝国」の人類学的実践を包括的に検証した坂野徹『帝国日本と人類学者』[2005] はセカンド・ステージの到来を告げるメモリアル・ワークといっただろう。また朝鮮 / 韓国に限っても、全京秀『韓国人類学の百年』[2004] が邦訳されたほか、村山智順 [野村 2001]、崔南善 [萩生 2002, 全成坤 2002]、李能和 [野村 2002]、孫普泰 [金 2006]、宋錫夏 [南 2004] といった植民地期を代表する研究者についてそれぞれ検証が推し進められている。

ところが、こうした状況にもかかわらず、赤松智城 (1886-1960) は奇妙に取り残された感がある [図 1]。秋葉隆 (1888-1954) と並ぶ『朝鮮巫俗の研究』[1937-38] の共著者、仏教近代化の立役者・赤松連城の孫、あるいは社会運動家・赤松克鷹、婦人政治家・赤松常子の兄として、その名はつとに知られているものの、その経歴がいかなるものであり、そこからいかなる学問的実践が立ち上げられたかについて、共有された理解は何一つないといっても過言ではない²⁾。良かれ悪しかれ、「マリノフスキー流の機能主義」「インテンシブ・メソッド」「二重モデル」といったキーワードによる理解が共有されている秋葉隆とは好対照といっただろう³⁾。



〔図1〕 赤松智城（1886 - 1960）（年次未詳）

ここに突破口を開いたのが、全京秀「赤松智城の学問世界に関する一考察——京城帝国大学時代を中心に——」〔2005〕である⁴⁾。真つ当な年譜も著作目録なかった赤松に関して、おそらく最初となる基本的な年譜と著作目録を作成した意義はきわめて重要であり、貴重な労作であることは疑いない。とはいえ、赤松智城という知的巨人にはなお未知の側面も多く、若干の事実誤認、なお検証を要する点も少なからず見受けられる。そこで本稿は、パイオニアワークとしての全論文を踏まえつつ、赤松智城の生家・徳応寺の資料調査から得られた知見を紹介し⁵⁾、植民地/人類学をめぐるコンテクストの

なかで赤松智城のはらむプロブレマティックを検討してみたい⁶⁾。

2. 徳応寺所蔵資料概要

日本の植民地/人類学を考えるにあたって赤松智城を取り上げる意義の一つに資料の「豊富さ」がある。戦前・戦中に活躍した多くの人類学者が敗戦とともに撤退を余儀なくされ、調査・研究資料の多くを日本に持ち帰ることが適わなかったのに対し、智城は昭和16年3月15日、京城帝大を「依願免本官」となったため〔図2〕、さまざまな資料を持ち帰ることが可能だった。それゆえ、山口大学赤松文庫をはじめ⁷⁾、資料が相対的に豊富なことは確かである⁸⁾。

とはいえ、そのことが彼の実像を直ちに復元可能にするわけではない。智城は自らの伝記的事項を語るものが少なく、また、彼と直接親交をもった人物による記述も決して多くはない⁹⁾。その意味で、生家・徳応寺に残された資料は語られざる智城の実像に迫る貴重な糸口である。

徳応寺は山口県周南市（旧・徳山市）にある浄土真宗本願寺派の寺院である〔徳応寺1992〕〔図3・4〕。ここには赤松一族の遺品がそれぞれの人物ごとに整



〔図2〕 「依願免本官」（昭和16年3月15日）

赤松智城論ノート（菊地）

理されており、智城に関するものとしては、およそダンボール1箱分の雑多な遺品、および写真類を納めたやや小ぶりの箱が残されている¹⁰⁾ [図5]。

これらの遺品を仮分類すれば、「履歴書および関係書類」「ノート」「図書・研究資料類」「書簡」「写真」「新聞スクラップ」「記念品」「寺務関係書類」「葬儀関係書類」「漢詩文」に分けられる。

まず、自筆履歴書¹¹⁾、および、辞令、任命書、委嘱状、叙位、叙官に関わる書類など60通が残されており、智城の「公的」な年譜は概ね復元することができる [赤松智城年譜参照] [図6]。

また、30冊の大学ノートが残されていたことも彼の学問遍歴を考える上で貴重である [図7]。フィールドノートの類は含まれていなかったものの、旧制高校や大学での勉学ノート、



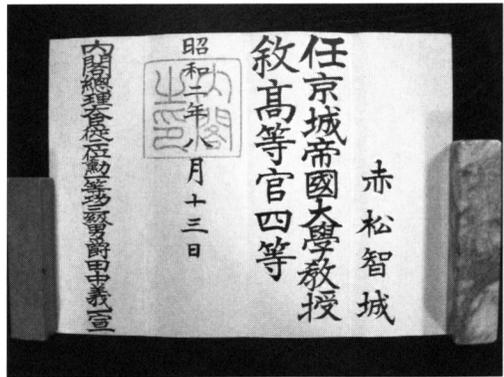
[図3] 徳応寺全景（山口県周南市）



[図4] 徳応寺歴代住職夫妻の墓



[図5] 徳応寺所蔵赤松智城関係資料

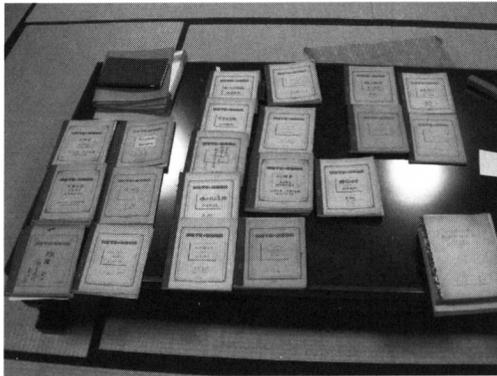


[図6] 「任京城帝国大学教授 叙高等官四等」
(昭和2年8月13日)

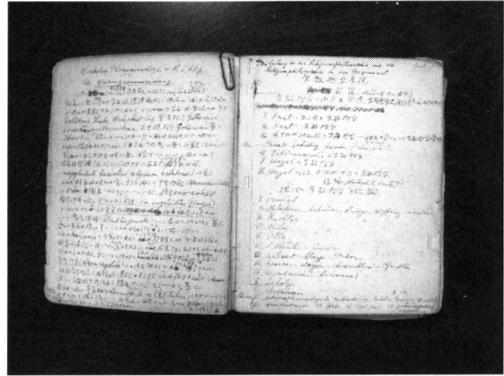
自身の講義ノートと思われるものが残されており、一部、彼の著作との対応関係を確認できるものもある¹²⁾ [図8]。

さらには、雑誌、抜刷、パンフレット等を含む図書類も数は多くはないが興味深い。智城の所蔵図書は晩年の勤め先・山口大学に寄贈されたため、手元に残されたのは自身の抜刷や論文掲載誌、および雑多なパンフレットの類が大半である。調査に関するものとしては、訪問先と思われる寺社のパンフレットのほか、巫俗の様子を描いた折り畳みの冊子『巫女儀』[刊年不詳]が興味深い [図9]。

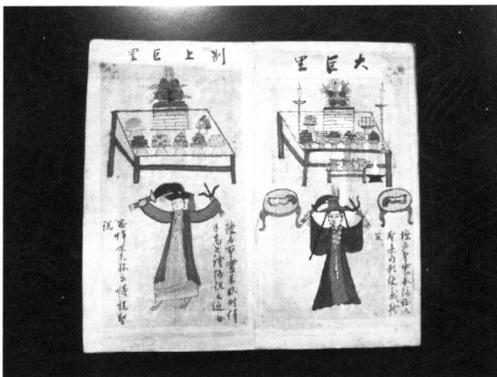
書簡については、事務的な通知書等を除いた私信に相当すると思われるものが20通あまり残されている。寺の関係者と交わした書簡のほか、西田幾多郎(哲学1870-1945)、久松真一(哲学1889-1980)、榊亮三郎(梵語学1873-1946)、高楠順次郎(仏教学1886-1945)、加藤常賢(中国



[図7] 自筆ノート



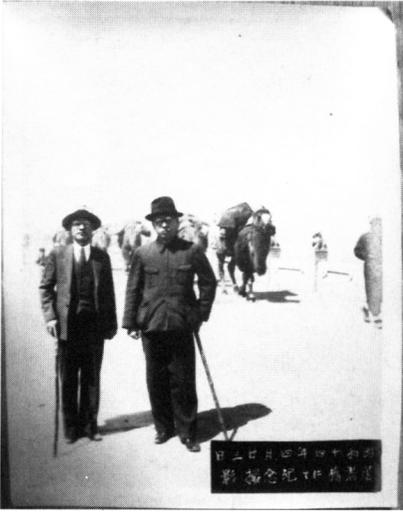
[図8] 自筆ノート『現代の宗教哲学』[1929]に対応。



[図9] 『巫女儀』[刊年不詳] 巫俗を描いた折り畳み式の冊子



[図10] 赤松智城関係資料のうち写真類



〔図11〕 写真「昭和十四年四月廿三日 廬溝橋にて記念撮影」 右が赤松智城？



〔図12〕 新聞スクラップ

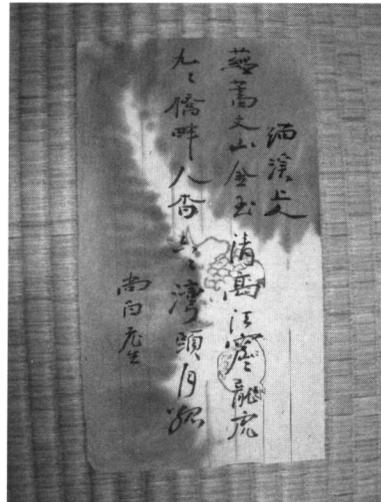
文学1894-1978), 常盤大定 (仏教学1870-1945), 瀧精一 (美術史1873-1945), 白井成允 (倫理学1888-1973), 水野梅暁 (1877-1949 仏教ジャーナリスト), 藤秀環 (僧侶・著述業1885-?) といった研究者・知識人と交わした書簡も残され, なかには著書・論文の内容に立ち入ったものもある¹³⁾。

「写真」については, ガラス乾板, フィルム, キャビネ版, 手札版, 絵葉書, 台紙・アルバム貼付のものなどさまざまな形で残されている¹⁴⁾ [図10]。家族写真を含む記念写真が大半を占め, フィールド・データとしての写真はほとんど含まれないが, それでも, フィールドにおける記念写真 [図11], あるいは, 他の研究者と共に撮影された写真などがあり, 智城の研究生活の一端をうかがうことができる。

新聞スクラップは, 153点の切り抜きが残されている [図12]。ほとんど戦後のもので, 内



〔図13〕 第五高等学校の襷



〔図14〕 父・照憧の漢詩文

容は宗教関連のものから国際情勢まで多岐にわたっており、晩年の智城の衰えざる知的好奇心がうかがわれる。

このほか、智城の学問的経歴とは比較的関わりの薄いものではあるが、揮毫のある色紙や扇子といった記念品類 [図 13]、寺院の経営に関わる寺務関係資料¹⁵⁾、智城の葬儀に関わる弔電などの葬儀関係資料¹⁶⁾、父・照憧の作による漢詩文などが残されている¹⁷⁾ [図 14]。

3. 赤松智城の学問形成 —— 京城帝大赴任以前を中心に ——

これらの資料により赤松智城のライフヒストリーは相当程度明らかになった。にもかかわらず、彼の学問形成を辿ることは決して容易ではない。たとえば、彼がいかにして人類学的関心を持つに至ったのかという問題もそれほど自明ではない。

智城の業績は、①初期から晩年に至るまで続けられる宗教学原論ともいべき宗教本質論研究（方法論を含む）、②欧米留学以後に展開されるイスラーム研究、③京城帝大赴任後に秋葉隆とともに進められる朝鮮・満蒙におけるシャーマニズム研究、の3つに大別できる [著作目録参照]。このうち、最も人類学的色彩が濃いのはもちろん③であるが、実のところ、最初期の論文から、デュルケーム、モース、ユベールといったフランス社会学の業績が参照されており、当初から宗教人類学的志向を確認できる¹⁸⁾。詳細を論じる余裕はないが、総じていえば、赤松智城の宗教学／人類学は、スタート時点から既に相対主義的な比較宗教学への志向を有し、現地調査の導入という契機を除けば、理論的・方法論的な断絶は認め難く、初発の宗教本質論という課題が時と共に次第に対象を拡大し、議論を精緻化させていく、といった様相を呈している。

そこで、以下、赤松智城のライフコースに現れる宗教学／人類学との接点について、資料調査の成果を交えつつ確認してみよう¹⁹⁾。

まず、彼の生家・徳応寺の家庭環境はいうまでもなく重要だろう。

赤松智城は、明治 19 (1886) 年、父・赤松照憧 (1854-1921)、母・安子 (1865-1913) の長男として誕生する。父・照憧は、京都岡崎・願成寺の住職・与謝野礼蔵の次男として生まれ（与謝野鉄幹は実弟） [図 15]、赤松連城 (1841-1919) の養子となり安子と結婚、夫婦力を合わせて私



[図 15] 与謝野晶子と子供たち（年次未詳）
晶子右隣が智城か

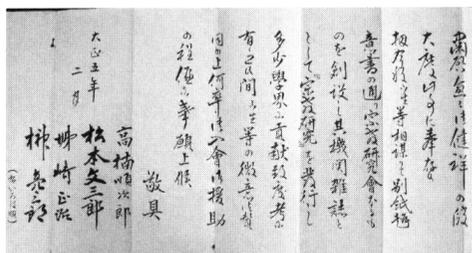
といい³¹⁾、新進気鋭のスタッフをそろえた京大に相当の知的興奮を感じていたようである。じっさい、発足当初の文科大学は学生数が少なく、また、スタッフと学生の年齢差もさほど大きくなかったため、専攻・学科や年齢を超えた親密な交流が展開されていた³²⁾。

徳応寺に残されたノートのうち 21 冊は大学での受講内容のノートで、智城の勉学の傾向がうかがえる。内訳は、谷本富（教育学 1867-1946）の「経済学史より見たる教育思想」「西洋教育史」「明治教化史論」「中等教育論」「欧州近世教育史」の 5 冊、松本亦太郎（心理学 1865-1943）の「心理学」3 冊、「続心理学」2 冊の計 5 冊、高瀬武次郎（中国哲学 1868-1950）の「支那哲学史」3 冊、藤代禎輔（独文 1868-1927）の「文学概論」「Max Dessoir 美學」の 2 冊、幸田成行（露伴）（国文学 1867-1947）の「日本文学各論」、朝永三十郎（哲学 1871-1951）の「続西洋哲学史」、野上俊夫（心理学 1882-1963）の「比較心理学」、天谷千松（生理学、生没年未詳）の「生理学」、松本文三郎（印度哲学 1865-1943）の「仏伝及教説卷二」、瀧精一（美術史 1873-1945）の「日本美術」、それぞれ各 1 冊である。現存するノートが受講した講義の全てではないので留保が必要だが、宗教学は意外に少なく、逆に教育学、心理学が目立つ。後年、智城は宗教学の一分派としての宗教心理学に関する論考を数多く執筆するが、その基礎が学部時代から築かれていることがうかがえる。

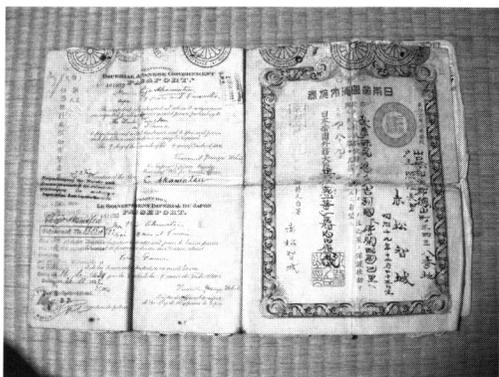
明治 43 年（1910）7 月、大学を主席で卒業、恩賜の銀時計を授与された智城は、ひきつづき大学院に在籍し、松本文三郎を指導教官として研究を続ける。龍谷大学の前身である仏教大学などへもこの頃から出講している。大学院には仏教学者・羽溪了諦（1883-1974）、東大卒業後、帰郷していた宗教学者・宇野円空（1885-1949）も在籍しており、「三羽鳥」と称される親交を結んだ [羽溪 1960: 129] [図 17]。その交流が原動力となって東京・京都両帝国大学の大学院生が連携し、その指導教官である東大の姉崎正治（1873-1949）、高楠順次郎、京大の松本文三郎、榊亮三郎を顧問に迎え、大正 4 年（1915）、「宗教学研究会」の設立に至ったことは羽溪 [1960] に詳しい [図 18]。翌年 4 月には会誌『宗教研究』が創刊され、智城の論文「最近の宗教心理学と宗教社会学」が巻頭に掲載されて



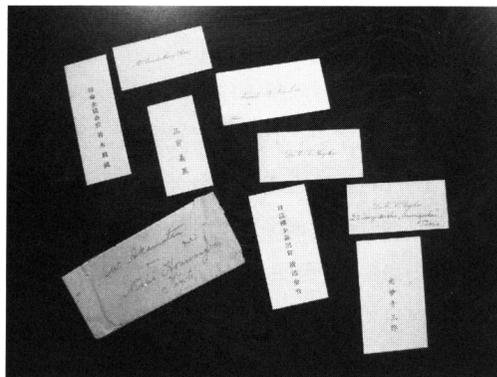
[図 17] 大学院在学中(?)のナップ(年次未詳)
後列左に智城、中央に宇野円空、前列左
に羽溪了諦。



[図 18] 「宗教学研究会」入会案内（大正五年二月）



〔図19〕 赤松智城旅券



〔図20〕 名刺類 青木周蔵, 清浦奎吾, 三宮義胤, 光妙寺三郎などの官吏とは、留学中に面識を得たものと思われる。

いる。

大正9年（1920）から12年（1923）までの約3年間、智城は欧米に留学する。徳応寺所蔵の旅券〔図19〕, 大学や研究機関の身分証, 図書館, 博物館等の利用証から, 留学中の精力的な活動を確認することができたが³³⁾, 留学中に何を学び, いかなる研究者と親交を結んだか, 具体的なことは依然つまびらかではない〔図20〕。ベルリン大の宗教学者トレルチの講筵に列したことを確認できるのみである〔赤松1924〕。

興味深いのは、渡航の際に乗船した郵船三島丸には、宇野円空とともに、赤松と同期に京大を卒業し、後に国史学教授となる西田直二郎（1886-1964）も乗船していたことである。渡欧後、宇野はパリでレヴィ＝ブリュールに学び、西田はケンブリッジでハットン、リヴァースに学んだことが知られている³⁴⁾。同年代、同期留学の宇野、西田という学友を通じて、これらの人類学者、宗教学者についての知見を得たことは十分に予想され、あるいは直接の知遇を得た可能性も考えられる。

後年、赤松は京都帝大の講師として招かれるが、その受け入れ先となったのは、彼の卒業した哲学科宗教学講座ではなく、西田の主催する史学科国史学専攻に設けられた神道史講座だった〔拙稿2005〕。さらにいえば、宇野円空も、あるいは柳田国男、折口信夫（1886-1953）、原田敏明（1893-1983）もこの講座に招かれている。これらの同時代の研究者といかなる学問的交流があり、そのことが、日本の人類学史、宗教学史をいかに形作っていくのかという問題は、非常に興味深い、そして、さらなる検証が必要なテーマだろう。

4. 赤松智城の植民地 / 人類学をめぐるいくつかの仮説

ここまで徳応寺所蔵資料を参照しつつ、赤松智城の学問形成、とりわけ京城帝大赴任以前の宗教学 / 人類学との接点を中心に眺めてきた。最後に彼の植民地 / 人類学をめぐるいくつかの仮説的な見通しを述べておきたい。

まず、智城が秋葉隆とともに朝鮮巫俗を研究対象とするに至った動機である。植民地権力により統治対象として巫俗の研究を要請され、それを受けて彼らの研究は遂行されたとする議論が一部に見られるが、状況証拠としてはともかく、研究の初発の動機に植民地権力の直接の関与を見いだすことは現時点においては困難である³⁵⁾。むしろ、「神聖観念論」を基調とした智城の宗教学的関心が朝鮮というフィールドと出会ったとき、巫俗研究は必然的な課題だったと考える。要するに、朝鮮巫俗の研究は、智城の一貫した宗教学 / 人類学的パースペクティブの上に位置づけられるのである。

とはいえ、そのことが智城の学問的実践と植民地権力との無関係を保証するわけでは決していない。彼らの調査は紛れもなく植民地状況で遂行されており、資金援助から情報収集、官僚、警察、軍隊による人的サポートに至るまで、植民地権力の支援の下にあったことは事実である[赤松智城満蒙調査行程表参照]。また、彼らの産み出した民族誌記述が植民地状況を対象化し得たかといえばそれは疑わしいし、そもそも、「原始宗教」を志向するスタンス自体に内在するオリエンタリズムを指摘することも可能だろう。

しかし、だからといって、(秋葉隆はさておき)智城の発言が植民地権力を容認し補完するものであったかといえば、それもまた疑問なしとはしない。むしろ、智城の発言は植民地権力に対して一種の批判的距離をキープしていたのではないか、というのが筆者の見解である。たしかに智城は、植民地朝鮮における宗教学の権威として、植民地の宗教政策、文化統治に関わる各種の公職に関与し、一見したところ植民地主義的な発言も行っている。だが、その内容をより詳しく見るなら、智城の相対主義的な宗教観は一貫しており、かつ、植民地権力による宗教統治の限界を指摘するもののように見受けられる。

この点、やや詳細に検討してみよう。智城の発言が植民地主義との共犯関係を問われるのは例えば次の一節である。

かくて私は内鮮の交渉をも考慮し公平にこれを観て、わが朝鮮の巫俗を善導する根本的一方策は、既述せる如く多少歪曲されてその巫俗の中に包容された仏教的要素をば、巫覡とその信者の間に宜しく正統化して以てこれを所謂真実教としての仏教に更に浄化発展せしめることに在ると信ずるのであつて、要するに従来余りに閑却されてゐた宗教的教化若くは宗教的社会教育の民衆に対する適切なる実施が今この場合にも又切実に要求されると思

ふのである〔赤松・秋葉 1938：320－321（赤松執筆部分）〕。

『朝鮮巫俗の研究（下）』の最後を締めくくるこの一文は、いかに朝鮮巫俗の詳細な理解を示したにせよ、それを「善導」すべき劣位の宗教、仏教へと「浄化発展」すべき遅れた信仰と措定している点で、植民地権力による宗教統治、信仰への暴力的介入を容認・正当化するロジックに過ぎないのではないか。この一文をそう理解することは可能であり、またじっさい、当時の文脈においてそう理解された蓋然性はきわめて高い。

だが、智城の他のテキストを参照するなら、主張の力点は必ずしも「善導」「浄化発展」にはないように思われる。

まずそもそも、智城において仏教は必ずしも宗教進化のファイナル・ステージではなかった。智城の仏教認識を示すテキストは決して多くはないのだが、たとえば『宗教学上より観たる真言密教の特質』[1927]においては、真言密教の神秘主義的、呪術宗教的側面が注視され、メラネシアのマナ観念やネイティブ・アメリカンのオレンダ観念といった、いわゆる「未開宗教」における神聖観念との比較が試みられている。仏教が高度な形式的発展を遂げた世界宗教の一つであるにせよ、その根底に横たわる神聖観念には人類史的普遍性が存在する、というのが智城の仏教認識のように思われる。

また、昭和10年11月27日、京城師範学校において開催された「心田開発座談会」〔赤松・他 1936〕における智城の発言は相当ユニークな位置を占めている³⁶⁾。

総督府主導の官制運動「心田開発運動」をめぐる、教育現場の当事者たちが中心となって意見交換する、という座談会の基調において、「実は夏期大学で宗教教育の話をしるといふことでありましたから、その方に二日ばかりやつたんで大分そのほうで話し尽くした為に、余り種がないのです」とネタ不足をかこち〔同前 22〕、あるいは、「山田さん当局のほうで心田開発と言つてをるのはどういふ意味か御説明できないですか」と当局の意図の確認を求めるなど〔同前〕、智城は巧妙に発言を避けている。どちらかといえば宗教教育、情操教育の手段をめぐる技術論に流れがちな雰囲気に対して、智城が「原理的」ともいうべき介入を行うのは座談会のほとんど最後である。

智城は、「最初から皆様のお話を承りまして一々同感」と参加者に同意を示しながら〔同前 52〕、「宗教的とかいふことに付いて少し概念的な言ひ方になりますけれども申し上げたひと思います」といって語り出す〔同前 53〕。だが、その論旨は「同感」からは程遠い。

宗教の本質といふことを私共よく申すのでありますが、さういふものは詰り既成宗教と言はれる色々の宗教の根底、宗教一般の根底にあるものでありまして、さういふものは本来私共に与へられてをるものなのであります。分りいゝ言葉で言ひますと、普遍的な宗教性

が他の道徳的良心、芸術良心と同じやうに私共には本来与へられてをると云ふのであります。その証拠は今色々宗教的な話を承りますと、私のやうな頑愚な者でも成程有難いと感じず、その感ずる所のものが私の中にあるのですから、普遍的な宗教性を与へられてをる訳であります。なんにも私にないなら、どんな偉い方がどんなに有難くお説きになつても分らぬ訳であります。よくお説きにならなくても、一言お説きになつただけでもひよつと思ふ、それは私に宗教性が与へられてをるからあなた方が仰しやるとその言葉を縁として私の中にあるものが出て来るであります。さういふ普遍的な宗教性を、私は宗教の本質だと言つてをるのであります [同前]。

「宗教の本質」とは多様な既成宗教の根底に横たわる神聖性への感受性であり、それは普遍的である。これが智城の宗教認識の出発点である。そしてその「宗教の本質」に具体的な形式を与えた結果が現実の多様な既成宗教である。

さういふものが私共に本来与へられてをるのでありまして、それが宗教の本質でありますけれども、それは言はば本質形式でありまして、一つのフォームで丁度真とか、善とか、美とかの観念が我々に与へられてをるといふ場合に、それは一つの形式として型が与へられてをるのでありまして、その型の中に色々なもの、所謂素材が入つて具体的な色々な宗教的信仰とか、宗教意識とか、宗教上の色々な行動が現はれて来ると、少し概念的な言ひ方でありますけれども、思ふのであります [同前]。

では、宗教教育はどうなるのかということ、「それで教育の方の問題に結付けて考へますと、既成宗教をその儘学校に持つて来ることは法令も許さぬことであります。殊に官公立の学校ではさうであります。学校は寺院の延長ではありませんから、既成宗教を持つて来ることは出来ないのであります」と [同前 54]、現行制度における既成宗教の介入を明快に否定し、「宗教の本質」についての知識を与え、学習者に信仰を選択する基礎を与える「一般的な宗教々育」を提唱する。

さういふ宗教性は非常に広いものでありまして、それに対して既成宗教は狭義の宗教と申してをります。学校教育に於てやり得ることは勿論一般的宗教々育でなければならぬ。特種的な、宗派的な教育であつてはならぬであります。[...] 兎に角表面上、既成宗教の教理の組織、方法をその儘学校に持つて来ることは出来ない。併し答申案の中にもありましたやうに、学校の宗教的な教材を与へて宗教的な情操を涵養することは十分出来ます。[...] 唯学校ではさういふ宗教上の或る理解を与へ、将来その子が大きくなつて家庭及び

社会の上色々の環境の影響に依つて自分がこの宗教を採るとか、或はこの信仰を堅く信ずるといふ為の一つの準備としてその素地を造ることが学校の教育に於て差当り要求されることではないかと思ふ。この信仰を採れとか、この宗教を信ぜよといふことは、官公立の学校に於ては正面から要求されることでもなし、又さうすることは弊害があるかと思ふのであります。言葉が少し至りませぬけれども、さういふ風に私は思うてをります [同前 54-55]。

ここからさらに道德教育へと話が進み、議論は意外な展開をみせる。

最後に道德教育の問題であります、学校に於て修身科で道德教育をやつてをる。さうして教育の御勅語を第一に掲げておやりになつてをる。これは当然なことあります。所が第一……これは少し言葉が失礼に当つたら御免を蒙りたいと思ひますが、教育の御勅語に致しましても、初めに「國ヲ肇ムルコト宏遠ニ」といふ建国の永遠性、或は皇室の無窮「天壤無窮ノ皇運」といふことが出てをりまして、さういふことが、教育勅語の根底にある訳であります。今日国体の明徴といふとさういふ風な建国の悠遠とか、無窮の皇運とか言ふ訳ですが、先もお話出ましたやうに、無窮とか悠遠とかを理解し、更に進んでそれを信ずることに於ては、どうしても宗教的な意味を持たざるを得ないと思ふ。少し言葉がぞんざいになりますけれども、普通の人間的なこと、或は人間的なことを対象としてをる道德の範囲は少し越えてをることになるのでありまして、実にあらたかな、賢い、尊い、有難いことがそこにある訳です。そこ迄行かなければ悠遠とか、無限とかと言つても、何にもならぬ。それを他の既成宗教の方で言へば、限りなき命や無量寿の如来であるとか少なくとも一脈通ずる宗教的な意義を持つてをらなければならぬのであつて、又現に持つてをる。「天皇は神聖にして侵すべからず」神聖といふ考が我々に取つては大いにある訳でありまして、天皇は神様である、だから教育勅語は神聖な神様の御言葉であると信ずることに依り、又説くことに依つて、本当に生命が育まれると思ふのであります [同前 56]。

微妙な表現ではある。だが、ここまでの議論を踏まえるなら、道德教育において天皇制とともに現れる「宏遠」「悠遠」「無窮」という言葉は、人知の領域を超えた「神聖なるもの」をめぐる概念であり、それは既に一つの宗教にはかならない、という理解を示したものと思われる。「これは少し言葉が失礼に当つたら御免を蒙りたいと思ひますが」「少し言葉がぞんざいになりますけれども」という言葉は、その危うさを自覚を示したもののようと思われる。そして赤松の発言は次の一節で閉じられる。

どこ迄も学校教育に於ては信教の自由は原則として立てなければならぬことでありますから、既成宗教の何教何派に偏ることはいけませんし、又学生や生徒が将来如何なる宗教生活をせられるかは、児童なり家庭なりに委せたら宜いのであつて、学校教育に於ては一般的な宗教的な情操を損はないやうに育て、行くことを、色々の教材を通してやるのが今の差当りの学校教育に於て行はるべきことだと思ひます。だから師範学校に於て、さういふ先生になるべき者に向つて、差当り宗教の知識を通して理解を与へるということをおやりになるに付いては、矢張りその方の専門の教師を師範学校に於て、或る方法を以て置かれるが宜い。丁度倫理学、法制経済を教へられると同じやうに、宗教上の知識を授けられる先生を置く。師範学校へ宗教科を入れる入れないといふことは、今問題になつてをりますが、それは適当な方法でお入れを願ふことは、是又至当なことであると、私は信じてをるのであります [同前 56-57]。

「信教の自由」が貫かれるべき学校教育において必要なのは、既成宗教の強制ではなく、宗教一般に対する知識の付与であり、そのためには、教員に対して宗教学的知識を授与することが至当である。座談会における発言としては妥当な落としどころなのかもしれない。だが、既成宗教の「何教何派」に「天皇制」も含まれるとすれば、決して穏当な発言ではないだろう。その不穏さに座談会の参加者がどこまで気付いていたかは不明であり、また智城自身、自身の発言の論理的帰結をどのように認識していたかは定かではない。だが、智城の発言を突き詰めれば、たしかにそこにたどり着く。

いずれにせよ、智城の主張の力点は、学校教育をはじめ、政治権力が宗教へ過度に介入することをいかに阻止するのにか、にあると思われる。だとすれば、先に掲げた仏教への「善導」「浄化発展」という発言も別の理解が可能だろう。

ここで、やや長くなるが、朝鮮総督府中枢院編・発行『心田開発に関する講演集』所収「朝鮮の仏教と民間信仰」[1936]の末尾の一段落を引いておこう。

そこに上来簡述した朝鮮の仏教と、民間信仰との関係といふことから、最後に今日問題となつてゐる心田開発の方法に就て少しく考へて見ますと、先づ所謂公的な宗教であつた仏教を更に振興し浄化することが必要であると共に、民間俗信の中には仏教的な要素が頼れてはゐるが、尚ほ多分に含まれて居りますから、これも浄化し向上せしめることに努めねばならない。然しそれと又相伴ふて朝鮮固有の信仰、例えば壇君とか或は天人といふやうな信仰をもそこに考慮して、つまり仏教と民間の信仰とが互いに並立して、而も調和することが可能であり、又これを可能ならしめるやうにすることがよいのではないかと思ふのであります。唯しかしそれは一理想か空想であると言はれるかも知れないけれども、私

は種々の信仰が並立し調和して居ることの実例を、現に我が日本内地の仏教徒に於て見るのであります。即ち健全なる信仰を持つて居る我が国民は、氏神にも参拝するし檀那寺にも参詣する。日本の仏教徒は何れも祖師の遺訓に依りまして、諸神諸仏菩薩をおろそかにせず、又してはならない。そこには両立調和の關係を保つて居るわけでありまして、朝鮮に於ても又さふいふ關係が実現し得る可能性があると思ふのであります。然し差当り最も警戒を要することは、民間大衆に本来与へられてゐる宗教的情操を徒らに輕蔑したり弾壓したり、撲滅しやうとすることでありまして、例へば巫俗に関しましても、それは多くの婦女子の俗信ではありませうが、それを唯弾壓したとしても——尤もそれは弾壓しても尽く撲滅されるものではありませんが——それに代わるべき勝れた宗教を与へればよいが、それを与へずして唯撲滅しようとするだけでは、心田の開発にも信仰心の啓培にもならない。この点は厳に注意しなければならぬと思ひます。尤も俗信の中には怪しい迷信もあつて、警察の処罰令に触れるやうなものは勿論取締らねばならぬが、しかしさきにも申したやうに、その中には相当に仏教的な要素もありますから、それは助長して向上させるやうに進めて行かなければならぬ。濫りに信仰心を弾壓しようとするは宜しく警戒しなければなりません。そこで要するに従来余りに閑却されてゐた宗教的教養、或は宗教々育の適当な実施が今日どの方面にも頗る必要であると考へる次第であります〔赤松 1936：168-169〕

ここでもやはり「仏教」の「浄化」という文言が現れるが、主張のポイントはむしろ、「迷信」の「撲滅」「弾壓」がもたらしかねない民心の荒廢に対する警告、さらには「撲滅」の不可能性である。そして、「仏教」とは、そのための一種の予防線と考えられる。日本人が神社と寺院の両方に参るやうに、朝鮮人が仏教と巫俗の両方を信仰してもかまわないではないか。そう主張する智城にとって、巫俗と仏教の混淆、あるいは、巫俗における仏教的要素を指摘することは、巫俗を弾圧する植民地権力にその暴力を思い止まらせるための一つの方法なのである。

「然し差当り最も警戒を要することは、民間大衆に本来与へられてゐる宗教的情操を徒らに輕蔑したり弾壓したり、撲滅しやうとすることでありまして」。ここに智城の問題意識が集約されているように思われる。それは必ずしも朝鮮民衆の抵抗と独立のためではなく、「宗教」に対する「権力」の介入を回避するという問題意識が、宗教人類学的方法に根ざした朝鮮巫俗の理解と結びついた結果であると思われる。

いずれにせよ、智城の植民地／人類学が当時のコンテキストにおいて持ち得た可能性と限界性は、もう少し注意深く押さえることが必要だろう。

*

以上、近代日本の仏教者として生まれ、西欧の宗教学／人類学に学び、植民地朝鮮の巫俗を研究した一人の宗教人類学者を検討してきた。本稿で概略を紹介した徳応寺所蔵資料は、赤松智城の実像を考えるにあたって重要な資料であることは疑いない。だが、それでもなお、近代日本仏教と植民地朝鮮人類学の狭間に生きた智城の「肉声」に迫ることは、依然、困難な課題である。

最後に、珍しく智城の「肉声」が聞こえる資料、大正10年（1921）春、智城が妹・常子に与えた絵葉書の一節を紹介して本稿を閉じることとしよう。

其後英語の勉強はどうですか。一通り英語をすましたら、フランス語をおやりなさい。巴里の女は皆仲々賢くて、日本の男よりもズット伶俐です。そして割合に質素です。裁縫もやれば料理も作ります。子供も育てます。巴里の大学には女学生が男学生の三分一位は居ります。私も現在ヘブライ語をフランスの女から習てゐます。その女は巴里の大学生です。女大学生ではあるが、日本の女学生よりもオトナシクて親切です。大体日本は女に限らず全て大改造の必要があります。

付記 徳応寺所蔵資料の調査にあたっては赤松家の皆様（赤松蕙氏、赤松泰城氏、赤松湘子氏）から一方ならぬ便宜を御提供いただき、とりわけ蕙氏からは義父・智城の晩年について貴重な回想をお聞かせいただいた。智城の徳山中学時代に関しては、徳山高校同窓会担当の山本達臣氏より資料を提供していただいた。また、人文研助手の李昇燁氏、久保昭博氏、田中祐理子氏、谷川穰氏、藤原辰史氏に資料収集・読解に関して御協力いただいた。日本文化人類学会第40回研究大会（2006年6月、於東京大学）における報告「赤松智城論ノート——徳応寺所蔵資料を中心に——」に対しても貴重なコメントを頂戴した。記して深謝する。

注

- 1) このあたりの事情を含めた日本における植民地／人類学の研究動向については拙稿〔2003〕参照。
- 2) この点を改めて認識させられたのは小松和彦他編『文化人類学文献事典』〔2004〕である。「他者や異文化への想像力を鍛える必読書1800点」〔帯コピーより〕の文献情報を収録した同書において、かろうじて秋葉隆『朝鮮民俗誌』〔1954〕が立項されているものの、赤松・秋葉共著の『朝鮮巫俗の研究』〔1937-38〕、『満蒙の民族と宗教』〔1941〕には項目も言及もなく、「赤松智城」は人名索引にすら登場しない。近代日本の他者認識と人類学のあり方を考えるとき、赤松・秋葉の2冊の大作は、功罪あわせ極めて大きな存在であると考えられるが、あまりに奇妙な扱いでは

ないだろうか。

- 3) もっとも、こうしたキーワード的理解の妥当性じたいも改めて検証する必要があるだろう。
- 4) 関連論文として全「2006」があるが、智城に関して特に目新しい知見が示されているわけではない。
- 5) なお、本稿のベースとなる徳応寺所蔵資料の調査は岡田浩樹氏（神戸大学）との協同プロジェクトであり、その成果は改めて別の形で問われることになるだろう。本稿はその中間報告であり、資料の解釈についても摺り合わせを経していない、多分に著者の私見に基づくものであることを予めお断りしておく。
- 6) 本稿における資料の引用に際しては、①引用文中の仮名遣いは原文に従う、②漢字は常用漢字に改める（固有名詞など一部例外あり）、③不明瞭な箇所は〔 〕で補う、④判読不能な箇所は■とする、⑤読みやすさを考慮して句読点を適宜補う、⑥地名やその他の表現に今日の観点からして不適切なものも歴史的資料としての性格を考慮してそのまま提示する、ものとした。
- 7) 智城の蔵書は彼の最後の勤務校となった山口大学の附属図書館に収められている。山口大学附属図書館文理学部分館編「1954」参照。
- 8) とはいえ、京城大学退官に際して持ち帰った資料の全てが残されているわけでもない。智城の生家・徳応寺は戦災により焼亡している。それゆえ、現在残されている智城関係資料は、智城が京都の住所に取り置いたものだったと推測される。
- 9) 全京秀も指摘するように、赤松智城を主題化した文章は、京大文学部哲学科で同期だった羽浜了諦の追悼文「1960」、城大で指導を受けた泉靖一の回想「1971（1969）」ぐらいである。このほか、七沢賢治「1977」もあるが、智城と直接の面識はないようで、智城の著作と羽浜の追悼文から智城の業績を検討した文章である。
- 10) もっとも、智城関係資料の中には、父・照懂、母・安子、弟妹たちに関わる資料も混入している。逆にいえば、徳応寺に保存されている他の赤松家の人物に関わる資料の中に智城に関わる資料が発見される可能性があり、さらに詳細な調査が必要である。
- 11) 履歴書は、作成日がそれぞれ「大正十五年四月 日」「大正十五年四月十日」「昭和二年二月二五日」の3通が残されている。いずれも下書であり、あるいは昭和2年8月13日に着任する京城帝国大学への就職に関わるものかと推測される。
- 12) 表紙に「研究ノート」と題された1929年のノートには宗教哲学・宗教現象学に関する事項が多く、同年に刊行された『現代の宗教哲学』[玉川学園出版部]と対応するものと思われる。
- 13) 調査との関係をうかがわせる書簡もある。吉林市在住の濱田純一からの手紙に記された満州旗人の春秋二季の祭祀についての情報は、『満蒙の民族と宗教』の第四章「満州族」の四「満州旗人の祭祀」の注（一〇）に利用されている[赤松・秋葉1941：219]。
- 14) 点数のみをあげておくと、アルバム6冊（322カット）、写真124カット、フィルム166カット、ガラス乾板25枚、絵葉書67枚が残されている（ただしこれは単純な点数で同一カットを含んでいる）。
- 15) 寺務関係資料としては、黒い小箱に、冊子2種3冊（『宗教法人令 宗教法人令施行規則』[刊年不詳]および『昭和十二年十一月調査 卒業生名簿 元私立徳山女学校』[1937]）のほか、戦災で焼けた寺の再建に関わる請求書、領収書等をまとめた封筒6点、地図「徳山市墓苑設計図 縮尺 1/1200」1点が収められている。このほか、通帳類65点も残されている。
- 16) 葬儀関係としては、2点の封筒に収められた、請求書、領収書、メモ類、案内状、式次第、役割表、故人略歴、式場写真、弔電、等々が含まれている。とりわけ興味深いのは130通の弔電で、

親類縁者のほか、智城と交流のあった研究者、妹・常子と関わりのある政治家・政治団体からのものが含まれている。学者関係では、高田保馬、羽溪了諦、塚本善隆（以上、京都大学）、石津照璽（東北大学）、長沢信寿（九州大学）、小笠原宣秀、桐溪順忍、工藤成性、二葉憲香、星野元豊（以上、龍谷大学）、石田光之、中野義照（以上、高野山大学）のものがある。政治家・政治団体関係では、国会議員からのもののほか、「伊勢神宮労組」からのものが含まれている。

- 17) 合計 36 点が残されている。照懂の漢詩文は智城編『尚白詩文集』[1937]として刊行されている。
- 18) たとえば、京都帝国大学文科大学（後に文学部）の紀要『芸文』に掲載された「宗教起源論の主要問題」には、「人類学的宗教学（Anthropological Science of Religion）」という語が用いられ [赤松 1911：85]、タイラーやスペンサーの説が論じられている。
- 19) なお、近代日本における仏教学・宗教学・人類学の展開に関しては、伊藤 [2005]、小口 [1956]、木村 [2005]、末木 [2004]、林 [2002] を参照した。
- 20) 照懂・安子夫妻に関しては、赤松安子 [1915]、林・清水 [1963]、脇 [1983] [1984] [1986] 参照。
- 21) 常子に関しては、赤松常子編集委員会編 [1977] 参照。
- 22) この点に関わるものとして、三男・義磨と三高在学中に同期だった山口県出身の民法学者・末川博（1892-1977 京大教授、立命館大学長）の回想を、やや長くなるが引いておこう。「義磨君と私とが知りあったのは、いつのことか、ハッキリしないけれども、とにかく、大正の初、京都の第三高等学校に学んでいたころのことである。義磨君は、当時の一部乙類（主として文学部に進む者のいたクラス）に席をおき、私は一部の丙類（語学でドイツ語を主とするクラス）に席をおいていたから、日々はいる教室はちがっていたのだが、同じ山口県の出身というようなことから親しくなったのかと思う。それに、そのころの高等学校では、生徒数も少なかった上に、文芸論とか人生論とかいったようなことを論じあう仲間が、クラスを離れて、集まる機会が多かったので、そんな機会に親しくなったのである。しかも、赤松というのは、義磨君たちの祖父にあたる赤松連城師やお父さんの赤松照懂師、お母さんの赤松安子女史などの高名によって、私には子どもの時からよく聞かされていた名前なので、何となく親近感があったように思う。そして義磨君の次の弟の克磨君は、第三高等学校で私たちよりも一級下であったけれども、夜おそく私の下宿にやって来て議論を吹きかけ、口論の果ては二人とも疲れて、いっしょにセンベイぶとんをかぶってねたようなこともあって、これも親しくしていた。また、その次の弟の五百磨君は、昭和の初ごろ、私の宅で食事を共にしながら、政治問題や社会問題を論じたこともあった。なお、今徳山にいられる長兄の智城先生にもベルリンでなくなった次兄の信磨さんにも知遇を得ており、妹の常子さんにもお目にかかったことがある。このように、赤松兄弟とは深い関係があるので、話をするときにも、赤松君とは呼ばないで、義磨君とか克磨君とか五百磨君とかそれぞれ区別して呼ぶようになっていた。そしてその三君がすでに亡いことを思うと、まことにさびしい」 [末川 1958：A]。
- 23) 連城に関しては「赤松連城」研究会 [1982-84] 参照。
- 24) 山口県立徳山高等学校百年史編纂委員会編 [1985：221] 参照。同書には智城が徳山中学の『校友会雑誌』1号 [1903?] に寄せた「瑞艇命名進艇式の記」（同校に寄贈されたボートの進艇式レポート）も再録されている。以上に関しては、徳山高校同窓会担当の山本達臣氏より御教示いただいた。
- 25) 『龍南会雑誌』107 [1904.10] 所収「在寮文科生懇話会第一回」および同 108号 [1904.11] 所

- 収「在寮文科生懇話会第二回」参照。
- 26) 『龍南会雑誌』117号 [1906]「雑報」覧に入学式において「旧生徒惣代赤松総務委員立て挨拶す」とある [70頁]。
- 27) 深草義平「第五高等学校仏教青年会沿革」[1921]によれば、五高仏教青年会は五高開学とほぼ時を同じくして設けられた大日本仏教青年会熊本支部が、智城の入学直後の明治37年9月に改称したものであり、「当時本会の幹部に赤松智城氏大塚治雲氏興元達全氏猪股仏讓氏等ありてその活動愈々目覚ましく市内鋤之身崎の白川河畔に白川洞なる五高仏教青年会会員合宿所を設けて益々本会の堅実を計りたり」と精力的な活動ぶりが伝えられている [深草 1921: 347]。
- 28) 第五高等学校編・発行『第五高等学校一覽 自明治三十九年至明治四〇年』[1906]参照。このうち高田と清原は専攻は異なるものの、智城と同期に京都帝国大学文科大学に入学する。
- 29) 高木は智城の在学当時から校友会誌『龍南会雑誌』に比較神話学に関する論文を発表している。卯野木盈二編 [1976] 参照。
- 30) 京大文学部の制度的事項に関しては京都大学文学部編 [1956] を参照した。
- 31) 智城の徳山中学の後輩で後に京大文学部の英文学教授となる石田憲次 (1890-1979) は次のように述べている。「私が京都帝国大学文科大学に注意を吸いつけられたのは、中学の大先輩赤松智城氏が五高を卒えて入学され、我等の校友会誌に近況報告の手紙を寄せられたのを眼にした時である。其處には盛沢山の講義が羅列してあつてどれも皆聴きたいものばかりという風に書かれていたと記憶するが、中学五年の私は殆どわくわくする思いしてそれを読んだ。[...] 私はそれ [京大入学] に先立つて前記の赤松氏に色々御教示願ひ、上洛後も何かと気をつけて頂いた」 [1956: 452-453]。
- 32) 日本史家・柴田実 (1906-97) は西田直二郎に関する文章のなかで次のように述べている。「[西田直二郎] 先生と同じ史学科第一期生には、清原貞雄・江馬務ら七人、同期の哲学科に兼常清佐・武内義雄・福井利吉郎・高田保馬・赤松智城ほかの人々がおり、学科の別をこえて学部全体がきわめて親密な関係にあり、西田先生は上記諸先生の誘掖と、学友との交遊を通じて、その学問と性格を形成されていった」 [1978a: 190]。
- 33) フランスに関しては、パリ大学文学部 (UNIVERSITÉ DE PARIS/FACULTÉ DES LETTERS) 身分証 (1920-21)、国立図書館 (BIBLIOTHÈQUE NATIONALE) の利用証 (1921.5.21-30)、国立高等研究院 (ÉCOLE PRATIQUE DES HAUTES ÉTUDES) 身分証 (1920.9-1921.6)、東洋言語専門学校 (ÉCOLE SPÉCIALE DES LANGUES ORIENTALES VIVANTES) 図書館利用証 (1920.9-1921.6)、ギメ美術館 (MUSÉE GUIMET) 図書館利用証 (1921.2.1-12.31) などが残されている。
- ドイツに関しては、ドイツ東洋協会 (DEUTSCHE MORGENLÄNDISCHE GESELLSCHAFT) 会員証 (1923)、ドイツ・イスラーム学協会 (DEUTSCHE GESELLSCHAFT FÜR ISLAMKUNDE) の活動案内などが含まれている。なお、欧米留学中にイスラーム近代主義者と面識をもったことが赤松 [1942: 6] に記されている。
- イギリスに関しては身分証の類はないが、徳応寺所蔵のクロボトキン著のパンフレット『An Appeal to the Young』に1923年5月6日にロンドンにおいて入手した旨が記されている。
- そのほか、留学中にギリシャ、エジプトを訪れたことがパスポートから確認できる。ギリシャに関しては特に関連資料を見出せなかったが、エジプトに関しては、考古遺跡入場許可証 (SERVICE DES ANTIQUITES DE L'EGYPTE) が残されている (全京秀 [2005: 160] に「旅行証明書」とあるのは多分これのこと)。なお、帰国後、『民族』誌 (1/3-6) に発表した

「古代文化民族に於けるマナの觀念に就て」[1926]において、古代エジプトの神聖觀念「カー(ka)」に多くの頁を割いている。

34) 宇野の経歴については伊藤 [1978]、西田の経歴については柴田 [1978a, 1978b] 参照。なお、宇野には「レヴィブリュール氏の思出」[1939]という一文があり、大正9年(1920)春に来日したレヴィブリュールが上洛した際、京都を案内したことが回想されている。宇野と赤松の関係を考えるなら、この機会に智城とレヴィブリュールが面識をもった可能性は十分考えられるが確証はない。

35) ただし、調査の進展には植民地権力との関係が少なからず影響している。『満蒙の民族と宗教』[1941]の「序言」に述べられている通り、同書の基礎となっているのは外務省文化事業部より委嘱された調査事業(1933-1938)のデータであり、昭和7年5月、京城帝大創立十周年記念式典に際し、元学長である東方文化学院東京研究所長・服部宇之吉(中国哲学1867-1939)が来学したことが契機となっている[赤松・秋葉1941:1]。とはいえ、研究計画自体は赤松・秋葉が立案したものであり、また、外務省側のフィールド調査に対する理解は必ずしも十分なものではなかったようである。

外務省外交史料館所蔵文書「満蒙ニ於ケル民俗及宗教ノ研究事業助成 赤松智城 秋葉隆 自昭和八年四月 至昭和十二年十二月」(「外務省記録 H門 東方文化事業 6類 講演, 視察及助成 研究助成関係雑件 第八巻」レファレンスコード B 05015882700, B 05015882800)所収の服部宇之吉が外務省文化事業部第一課長に宛てた書簡(昭和11年4月9日)は、当初三年度を予定していた調査事業を更に二年延長するに際して、外務省側から難色が示されたことに対し、次のように応じている。

「貴課所管ノ満蒙文化ニ関スル研究ノ中、京城帝国大学教授赤松智城及同秋葉隆両氏ノ担任スル満蒙宗教土俗ニ関スル研究ハ、当初一般ノ例ノ如ク本人ノ申出ニ付審議採用セルモノニアラズシテ、満蒙文化調査委員会ニ於イテ右両人ニ担任セシムル事ニ決定シ、其ノ上ニテ本人等ヲシテ研究調査ノ具体案ヲ提出セシメタルモノニ有之候。而シテ調査研究期限ニ関シテハ三ケ年ニテハ不足ナル事ヲ予メ想像シタルモ、先三ケ年ヲ一期トナシ、右期間ニ於ケル研究調査ノ進捗ノ模様ニヨリ、延期ノ必要アル場合ニハ延期スルコトノ予想ヲ以ツテ、期間ヲ三ケ年ト限定シタルモノニ有之候。両人トモ熱心ニ調査研究ニ従事致居候モ、何分公務ノ余暇ヲ以ツテスルト、調査研究地域ガ危険区域ニ属スルモノアルトニ依リ、未調査研究ヲ了セザル地方有之、旁当初ノ予想ノ如ク猶二ケ年ノ延期ヲ許可セラルゝ事ニ願度候先ハ右申上度候」。

36) 参加者は、智城のほか、安昌基(明倫学院講師)、今泉隆宣(龍谷高女学監)、鎌塚扶(総督府編修官)、肥塚正太(報徳会理事)、松木巳之助(丁子屋主任)、白井成允(京城帝大教授)、関勝弥(天晴会理事)、高橋濱吉(京城女師校長)、津田栄(城大予科教授)、丹羽清次郎(Y・M・C・A)、野々村修瀧(京城女高普教諭)、長谷川行栄(高野山院代)、日吉春吉(京畿道社会主事)、藤吉虎秀(龍山小学校長)、松月秀雄(京城帝大教授)、山田直記(総督府視学官)、山本吉久(校洞普校長)、渡辺信治(朝鮮初等教育研究会長)である。なお、座談会の主催者「朝鮮初等教育研究会」は、「京城師範学校の附属学校の職員を以て組織」された研究会で機関誌『朝鮮の教育研究』を刊行している[赤松他1936:20]。また、心田開発運動については川瀬 [2002] 参照。

文献（智城著作を除く）

- 赤松常子編集委員会編 1977 『雑草のようにたくましく——赤松常子の足あと——』赤松常子顕彰会
- 赤松安子 1915 『清淑院全集』金蘭会出版部
- 「赤松連城」研究会編 1982-1984 『赤松連城資料（上・中・下）』本願寺出版部
- 秋葉隆 1931 「朝鮮巫俗に於けるデュアリズム」『朝鮮』192
- 秋葉隆 1937 「徳物山と鶏龍山」『朝鮮』267
- 石田憲次 1956 「生徒から学生へ」京都大学文学部編・発行『京都大学文学部五十年史』
- 泉靖一 1971 「思い出の人々——文化人類学の歩み——」『泉靖一著作集 6 文化人類学に何を求めるか』読売新聞社（初出は『東京新聞』1969年6月17日-7月29日）
- 伊藤亜人 2005 「日本人の巫俗好き」『韓国朝鮮の文化と社会』4
- 伊藤幹治 1978 「宇野円空」伊藤幹治・森鹿三『日本民俗文化大系 11 内藤湖南・宇野円空』講談社
- 宇野円空 1939 「レキブリユール氏の思出」『季刊宗教研究』1/1
- 卯野木盈二編 1976 『高木敏雄初期論文集 上』高木敏雄顕彰会・共同体社
- 小口偉一 1941 「書評：シャマニズム研究への寄与 赤松・秋葉両教授の『朝鮮巫俗の研究』及び『満蒙の民族と宗教』」『宗教研究』季刊3/2
- 小口偉一 1956 「宗教学五十年の歩み——東京大学宗教学講座創設五十年を記念して——」『宗教研究』147
- 萩生茂博 2002 「崔南善の日本体験と『少年』の出発——東アジアの〈近代陽明学〉(Ⅲ)-1——」『季刊日本思想史』60
- 川瀬貴也 2002 「植民地期朝鮮における『心田開発運動』政策」『韓国朝鮮の文化と社会』1
- 菊地暁 2003 「帝国の『不在』——日本の植民地人類学をめぐる覚書——」山本有造編『帝国の研究』名古屋大学出版会
- 菊地暁 2005 「主な登場人物——京都で柳田国男と民俗学を考えてみる——」『柳田国男研究論集』4
- 金廣植 2006 「植民地『郷土』を研究することの意味——朝鮮学，朝鮮民俗学，孫普泰の再考——」『大阪大学日本学報』25
- 京都大学文学部編・発行 1956 『京都大学文学部五十年史』
- 木村清孝 2005 「日本における仏教研究の百年」『宗教研究』343
- 小松和彦他編 2004 『文化人類学文献事典』弘文堂
- 坂野徹 2005 『帝国日本と人類学者』勁草書房
- 柴田実 1978a 「解説（西田直二郎先生と『日本文化史序説』）」西田直二郎『日本文化史序説（三）』講談社学術文庫
- 柴田実 1978b 「西田直二郎」柴田実・西村朝日太郎『日本民俗文化大系 10 西田直二郎・西村真次』講談社
- 渋沢敬三 1993 『渋沢敬三著作集 4 南米通信 雁信集・旅譜と片影』平凡社
- 末川博 1958 「赤松義鷹君をおもう——序にかえて——」赤松義鷹『美の原理』赤松義鷹遺稿出版行会
- 末木文美士 2004 『近代日本と仏教』トランスビュー
- 第五高等学校開校五十年記念会編 1939 『五高五十年史』

- 全京秀（岡田浩樹・陳大哲訳） 2004 [原著 1999] 『韓国人類学の百年』 風響社
- 全京秀 2005 「赤松智城の学問世界に関する一考察——京城帝国大学時代を中心に——」 『韓国朝鮮の文化と社会』 4
- 全京秀 2006 「植民地の帝国大学における人類学的研究——京城帝国大学と台北帝国大学の比較——」 岸本美緒編 『帝国』 日本の学知 3 東洋学の磁場』 岩波書店
- 全成坤 2002 「崔南善における檀君神話の発見と親日派の再解釈——植民地朝鮮における『同化政策』をめぐって」 『大阪大学日本学報』 21
- 徳応寺 1992 『寺史』 徳応寺
- 七沢賢治 1977 「赤松智城」 『宗教学年報』 21 [特集：日本宗教学の人々]
- 南根祐 2004 『『実践的』 ナショナリズムの虚実——宋錫夏の『朝鮮民俗学』を中心に——』 佛教大学総合研究所編・発行 『佛教大学総合研究所紀要』 別冊 「近代国家と民衆統合の研究——祭祀・儀礼・文化——」
- 野村伸一 2001 「特集：村山智順が見た朝鮮民俗」 『自然と文化』 66
- 野村伸一 2002 「李能和『朝鮮の巫俗』註（上・下）」 『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』 28-29
- 羽溪了諦 1960 「赤松智城博士を悼む」 『宗教研究』 163
- 林いし・清水しげ編 1963 『白梅』 元徳山女学校同窓会
- 林淳 2002 「近代日本における仏教学と宗教学——大学制度の問題として——」 『宗教研究』 333
- 深草義平 1921 「第五高等学校仏教青年会沿革」 『龍南会雑誌』 176
- 山口県立徳山高等学校百年史編纂委員会編 1985 『山口県立徳山高等学校百年史』 山口県立徳山高等学校
- 山口大学 30 年史編集委員会編 1982 『山口大学 30 年史』 山口大学
- 山口大学附属図書館文理学部部分館編・発行 1954 『山口大学赤松文庫図書目録』
- 脇英夫編 1983 「赤松照懂・赤松安子夫妻年譜——社会事業を中心に——」 『徳山地方郷土史研究』 4
- 脇英世 1984 「赤松照懂の部落改善セツルメント活動」 『山口県地方史研究』 52
- 脇英世 1986 「赤松照懂研究 I ——青年時代——」 『徳山地方郷土史研究』 7

赤松智城論ノオト（菊地）

〈赤松智城年譜〉（1）

年	月	日	事項	典拠
1886	12	23	山口県都濃郡徳山町に生まれる（徳応寺住職・赤松照憧の長男，母・安子）	* 自筆履歴書
1889	09	16	次弟・信麿（1889 - 1923）出生	『寺史』75
1892	03	10	三弟・義麿（1892 - 1946）出生	『寺史』32
1894	12	04	四弟・克麿（1894 - 1955）出生	『寺史』75
1897	08	11	妹・常子（1897 - 1965）出生	『寺史』75
1900	02	19	五弟・五百麿（1900 - 34）出生	『寺史』36
1901	07	08	六弟・廉麿（1901 - 74）出生	『寺史』37
1904	03		徳山中学校卒業（3期生）	* 自筆履歴書， 『山口県立徳山高等学校百年史』
1904	07		第五高等学校入学	* 自筆履歴書
1904	09		五高仏教青年会参加	『龍南会雑誌』176:346
1904	10	?	五高，在寮文科生懇話会第一回にて「学理的研究の価値」講演	『龍南会雑誌』107:95
1904	11	?	五高，在寮文科生懇話会第二回にて「天地開闢の比較論」講演	『龍南会雑誌』108:100
1906	09	12	五高，入学式，旧生徒総代として挨拶	『龍南会雑誌』117:70
1906	10	04	五高，「転校事件」につき委員となる（大川周明，高田保馬ほか六名）	『龍南会雑誌』118:50
1907	06		第五高等学校卒業（同窓に高田保馬，松村武雄，大川周明，清原貞雄など）	* 自筆履歴書，『龍南会雑誌』122
1907	09		京都帝国大学文科大学哲学科入学	* 自筆履歴書
1910	07	13	京都帝国大学文科大学哲学科宗教学専攻を主席で卒業，恩賜の時計を拝領	* 卒業証書， * 自筆履歴書，赤松安子 1915: 6
1910	09		大学院進学，指導教官・松本文三郎，特選給費生（一年間）	* 自筆履歴書
1911			真言宗連合京都大学及ピ仏教専門学ノ教授トシテ宗教学宗教史宗教哲学哲学史及哲学概論等ヲ講ズ	* 自筆履歴書
1911			与謝野鉄幹渡欧社行会（於京都ホテル）出席	京都ホテル HP
1912	06	07	私立高等学院教授	* 辞令
1913	02	02	母・安子（1865 - 1913）死去（於京大病院）	『寺史』68
1913	04	07	私立仏教専門学校教授	* 辞令
1914	04	18	真言宗連合大学教授	* 辞令
1915	05	?	宗教学研究会創設の発議（印度・宗教学会の席上にて赤松が発議，京大側の赤松，宇野，羽溪，東大側の矢吹慶輝，木村泰賢を中心に発会）	羽溪 1960: 424
1916	04	08	『宗教研究』創刊	羽溪 1960: 424
1916	07		次弟・信麿，京都帝国大学医科卒	『寺史』68
1916	11	19	宗教学研究会大会（於文科大学）にて講演「神聖観念」	
1917	07		三弟・義麿，東京帝国大学文学部哲学科（美学専攻）卒業（三高より進学）	『寺史』68
1918	07		四弟・克麿，京都帝国大学法学部（政治学科）卒（三高より進学）	『寺史』68
1919	07	20	祖父・連城（1841 - 1919）死去	『寺史』68
1920	04	01	仏教大学（現・龍谷大学）教授（宗教学宗教史講座担当）	* 辞令，* 自筆履歴書
1920	05		学位論文『原始的神聖観念（Primitive Sacredness）の研究』提出	学位論文（京都大学附属図書館所蔵）
1920	08	16	受牒	*
1920	09	25	住職就任（父・照憧は同和地区に移り，同和事業に専念）	『寺史』68，* 戸籍抄本
1920	09	26	京都印度宗教学会九月例会兼宇野赤松両学士渡欧送別会（於学生集会所）	『宗教研究』4 / 14: 122
1920	09	26	欧米留学（1920. 09. 27 - 1923. 06）	* 赤松旅券，* 自筆履歴書
1920	09	27	神戸出航	* 赤松旅券
1920	10	01	浄土宗管長より感謝状（教育貢献に対して）	* 感謝状
1920	10	07	京都帝国大学，留学許可	* 許可状
1920	10	12	香港寄港	* 赤松旅券
1920	10	23	シンガポール寄港	* 赤松旅券
1920	10	26	ペナン寄港	* 赤松旅券
1920	10	31	コロombo寄港	* 赤松旅券
1920	11	19	マルセイユ寄港	* 赤松旅券

人 文 学 報

〈赤松智城年譜〉(2)

年	月	日	事項	典拠
1921	03	26	高野山より年 700 円の奨学金 (3 カ年)	*通知
1921	04	05	本願寺より海外研究生に任命, 年 800 円の奨学金を受給	*辞令
1921	08	24	父・照憧 (1862 - 1921) 虹ヶ浜にて急逝	『寺史』69
1921	09	06	森チヨと婚姻	*戸籍抄本
1921	09	15	ベルリン入り	*赤松旅券
1922	04	15	本願寺より海外研究生 (年 800 円支給) に命ぜらる	*通知
1922	05	15	エジプト入国	*赤松旅券, *遺跡見学許可証
1923	01	23	次弟・信麿, ベルリンにて死去	『寺史』31
1923	01	25	博士号取得, 文学博士	*学位記
1923	03	02	ベルリンにてイタリア入国許可証発行	*赤松旅券
1923	03	02	ベルリンにてフランス入国許可証発行	*赤松旅券
1923	03	05	スイス・Thayngen 通関	*赤松旅券
1923	03	31	ベルリンにてイギリス入国許可証発行	*赤松旅券
1923	04	24	ブルターニュ行証明証発行	*赤松旅券
1923	04	27	Dover 通関	*赤松旅券
1923	05	02	ロンドンにてアメリカ入国許可証発行	*赤松旅券
1923	05	06	P. KROPOTKIN, An Appeal to the Young, ロンドンにて入手	*徳応寺所蔵資料
1923	05	?	ニューヨークよりアメリカ入国	*赤松旅券
1923	06	04	サンフランシスコよりアメリカ出国	*赤松旅券
1923	06	?	帰国	*自筆履歴書
1924	04	01	龍谷大学宗教学部宗教学第一講座主任 (心理学講座兼任), 龍谷大学評議員 (二年間)	*辞令
1925	09	25	真言宗高野山大学教授	*辞令「任真言高野山大学教授」
1926	02	23	本願寺学制調査会委員	*辞令「学制調査会委員ヲ命ス」
1926	05	13	本願寺臨時制度調査会評議員	*辞令「臨時制度調査会評議員ヲ命ス」
1926	05	21	臨済宗大学教授	*辞令「臨済宗大學教授ヲ囑託ス」
1927	03	17	石川県金沢市にて尚雨出生 (三弟義麿三男, 智城の養子となり徳応寺第 18 世院主)	『寺史』40
1927	08	13	京城帝国大学法文学部宗教学・宗教学講座教授 (龍谷大学兼任), 叙高等官四等, 本俸七級下賜	*辞令「任京城帝国大学教授 叙高等官四等」*許可書「龍谷大学講師兼職ノ件許可ス」*辞令「宗教学, 宗教学講座担任ヲ命ス」
1927	09	15	叙正六位	*叙位「叙正六位」
1927	09	21	臨済宗大学教授辞職	*通知「依願教授ヲ解ク」
1928	04	01	龍谷大学文学部教授	*辞令「龍谷大學文學部講師 赤松智城 任龍谷大學文學部教授」
1928	05		開城・徳物山 (トムルサン)・將軍堂訪問 (同行者・秋葉隆)	秋葉 1931: 109
1928	07	04	本願寺より親授待遇	*通知「親授待遇ス」
1929	04	01	龍谷大学文学部講師	*辞令「任龍谷大學文學部講師」
1929	06	22	無有談会 (於京城帝大民俗参考品室) にて済州島調査報告	『民俗学』2/1: 53
1929	12	31	本俸六級俸下賜	*通知「本俸六級俸下賜」
1930	03	29	龍谷大学文学部講師辞職	*通知「依願解講師」
1930	04		昭和 5 - 7 年度帝国学士院補助に依り「朝鮮及び満州に於ける巫俗の研究」(共同研究者: 秋葉隆)	秋葉 1931: 116
1930	05	03	松本博士還暦記念会 (於松本文三郎邸内仏教徴古館 [銀閣寺町])	*
1930	05	10	東京帝国大学宗教学講座創設廿五年記念宗教学大会 (於東大) にて「朝鮮の聖樹」報告, 日本宗教学会設立, 設立委員に	『宗教学紀要』同文館
1930	09	30	高等官三等に陞叙	*「陞叙高等官三等」

赤松智城論ノオト（菊地）

〈赤松智城年譜〉（3）

年	月	日	事項	典拠
1930	10		咸鏡南道・北海道巫俗調査、会寧訪問、「家宅求命」行事見学、（同行者・秋葉隆）	秋葉 1931: 112
1930	12	01	叙従五位	*叙位「叙従五位」
1932	05		元総長・服部宇之吉来学、外務省文化事業部委嘱として満蒙研究を指示	赤松・秋葉 1941: 1
1932	10	01	鶏龍山調査（同行者：秋葉隆ほか）	秋葉 1937
1933	06	30	本俸五級俸下賜	*通知「本俸五級俸下賜」
1934	01	02	五弟・五百麿（1900-34）死去	『寺史』36
1934	05	18	朝鮮仏教典籍展覧会記念講演会開催（赤松、「京城帝国大学仏教青年会の名前で宋錫夏、孫普泰に案内状送付）	全京秀 2005: 172
1934	10	28	白雲荘にて、赤松、秋葉、宋錫夏、孫普泰、記念写真撮影	全京秀 2005: 172
1934	12	28	高等官二等に陞叙	*通知「陞叙高等官二等」
1935	02	01	叙正五位	*叙位「叙正五位」
1935	03	05	龍谷大学図書館に図書寄託	*預書
1935	04	27	朝鮮総督府中枢院、「信仰審査委員会」設置	全京秀 2005: 175
1935	05		京城を訪れた渋沢敬三と面会	渋沢著作集 4: 340
1935	06		信仰審査委員会、「朝鮮の固有信仰に就いて」講演会開催	全京秀 2005: 175
1935	11	27	朝鮮初等教育研究会主催「心田開発座談会」参加（於京城師範学校醇和会館）	『朝鮮の教育研究』88
1936	08	29	三弟・義麿の三男・尚爾を養子に迎える	『寺史』77
1936	08	00	光徳寺大乘仏教研究会夏期講座にて「宗教と教育」講演	『光徳』51
1937	03	04	朝鮮総督府より社会教化に関する講演を囑託	*辞令「社会教化ニ關スル講演ヲ囑託ス」
1937	04	01	都濃佛教団顧問	*顧問囑託状
1937	11	01	満州国民生部囑託社会司弁事（1年間）として宗教調査（無給、旅費受給）	*「辞令（康徳四年十一月二日）」ほか
1937	12	31	本俸四級俸下賜	*通知「本俸四級俸下賜」
1938	03	05	今村頼古希記念の会に出席（宋錫夏、村山智順、秋葉隆、孫普泰、金斗憲ら参加）	全京秀 2005: 173
1938	04	20	京都帝国大学文学部講師囑託	*辞令「昭和十三年度文學部講師ヲ囑託ス」
1938	05	09	勲四等	*履歴メモ
1938	12	22	京大民俗学会にて「内蒙に於ける宗教民族に就て」報告	菊地 2005
1939	07	24	建国大学囑託として派遣（書類上は14年5月より15年4月まで一年間）	陸満密受第五九号 関東軍「滿洲国建国大学研究院ニ於ケル研究事項委嘱方ニ關スル件」
1940	01	10	高等官一等	*辞令「陞叙高等官一等」
1940	03	16	勲三等	*履歴メモ
1940	10	30	高野山大学における教育上の貢献により表彰、金一封、念珠一連授与	*表彰状、*目録
1941	03	15	京城帝国大学教授、依願免本官（賞与金二千二百円）、本俸三級	*辞令「依願免本官」
1941	03	31	京都帝国大学文学部講師囑託	*辞令「昭和十六年度文學部講師ヲ囑託ス」
1941	04	01	龍谷大学講師	*辞令「任龍谷大学文学部講師」
1941	04	12	叙正四位	*叙位「特旨ヲ以テ位一級被進」 *叙位「叙正四位」
1941	05	20	本願寺日本教学研究所以参加	*辞令「日本教学研究所以參與ヲ囑託ス」
1942	07		龍谷大所蔵コーラン文献調査	龍谷大学 HP
1942	09	05	本願寺第一回法主賞受賞候補者審査員	*辞令「第一回法主賞候補者審査員ヲ命ス」

人 文 学 報

〈赤松智城年譜〉(4)

年	月	日	事項	典拠
1942	09	30	京都帝国大学文学部講師(一年間)	*辞令
1942	11	25	佛教専門学校三十周年記念により記念品贈呈	*感謝状
1943	01	06	九州帝国大学法文学部宗教学講師	*辞令「法文学部ニ於ケル宗教学ノ講義ヲ嘱託ス」
1943	04	01	龍谷大学教授	*葬儀関係書類
1943	08	01 03	第一回東亜講座(於京都帝大楽友会館, 大東亜学術協会主催, 毎日新聞社後援)にて「回教ノ由来ト特色」講演(肩書は前京城帝大教授文学博士)	『学芸』1/3:目次
1946	05	31	三弟・義麿(1892-1946)死去	『寺史』78
1947	03	31	龍谷大学文学部教授依願解職	*通知「依願解職」
1948	08	15	徳山遺族会長・本城嘉守より徳山遺族会顧問に推戴	*推戴状
1948			養子尚爾(三弟・義麿三男)入寺	『寺史』28, 69
1949	12	02	文部教官・山口大学文理学部講師	*葬儀関係書類
1950	10	31 ?	山口大学文理学部教授(社会学)	*葬儀関係書類, 『山口大学30年史』
1949	05	24	妻・チヨ, 死去(62才)	『寺史』78
1950	12	06	山口大学休職(1951.12.15まで)	*葬儀関係書類
1952	09	20	山口大学休職(1952.12.20まで)	*葬儀関係書類
1952	12	19	山口大学辞職	*葬儀関係書類
1954	03		山口大学図書館に蔵書寄贈(洋書1383部, 1649冊, 和漢書311部, 592冊「赤松文庫」)	『寺史』28, 『赤松文庫図書目録』
1955	12	13	四弟・克麿(1894-1855)死去	『寺史』78
1960	02	11	死去(法名:円融院釈真教智城法師)	『寺史』28

- 凡例
- ・この年譜は徳応寺所蔵赤松智城関係資料, 赤松智城著作および関連資料に基づいて作成した。
 - ・典拠を示す際, 徳応寺所蔵資料には「*」を付し, 資料名(仮), 資料中の主要な文言を挿入した。
 - ・著作物を典拠とした際は(著者名+刊行年+頁数)を示した。場合によっては(資料名+(巻号)+頁数)によって表記した。

赤松智城論ノオト（菊地）

〈赤松智城著作目録〉（1）

年	月	日	著作名	発行
1911	07	01	「宗教起源論の主要問題」	『芸文』2/7
1912			「呪文と祈禱」	『密教講演』2
1913	07	01	「聲字実相觀の比較」	『密宗学報』1
1913	09	01	「宗教と哲学」	『密宗学報』3
1913	10	01	「宗教と哲学」	『密宗学報』4
1913	11	01	■「宗教と哲学」	『密宗学報』5
1914	06	01	「宗教的思弁の変遷」	『密宗学報』12
1914	09	01	■「普遍的宗教意識」	『密宗学報』15
1914	10	01	■「最新の宗教社会学説」	『密宗学報』16
1914	11	01	■「認識論と宗教社会学説」	『密宗学報』17
1914	11	15	「社会学と現代宗教学との交渉」	『日本社会学院年報』2/1・2合冊号
1914	12	01	■「認識論と宗教社会学説」	『密宗学報』18
1914			■『基督教会史』	仏教会蔵版*
1915	01	01	「歴史派の宗教学觀念」	『無盡燈』20/1
1915	02	01	■「宗教の両極性」	『密宗学報』20
1915	06	01	■「宗教の両極性」	『密宗学報』24
1915	09	01	「汎神論の起源」	『芸文』6/9
1916	04	08	「最近の宗教心理学と宗教社会学」（創刊号巻頭論文）	『宗教研究』1/1 [『挽近』再録]
1916	06	01	「宗教と魔術」	『無盡燈』21/6 [『挽近』再録]
1916	07		「宗教に於ける個人化的傾向の起源」	『宗教研究』1/2
1916	08	01	「宗教と魔術」	『無盡燈』21/8 [『挽近』再録]
1916	09	01	「宗教と魔術」	『無盡燈』21/9 [『挽近』再録]
1916	09	01	■「驚異感、神秘感、及神聖感」	『密宗学報』39
1916	10	01	「宗教と魔術」	『無盡燈』21/10 [『挽近』再録]
1916	10	01	■「驚異感、神秘感、及神聖感」	『密宗学報』40
1917	03	01	「宗教的規範意識」	『哲学研究』2/3
1917	11	18	「神聖觀念論」	『宗教研究』2/6 [『挽近』再録]
1918	03	28	「神聖觀念論」	『宗教研究』2/7 [『挽近』再録]
1918	08	18	「神聖觀念論」	『宗教研究』2/8 [『挽近』再録]
1918	11	01	「最近宗教心理学の傾向」	『密宗学報』65 [『挽近』再録]
1918	12	01	「最近宗教心理学の傾向」	『密宗学報』66 [『挽近』再録]
1919	01	01	『タブー』論	『哲学研究』4/1
1919	02	01	「最近宗教心理学の傾向」	『密宗学報』68 [『挽近』再録]
1919	03	01	「最近宗教心理学の傾向」	『密宗学報』69 [『挽近』再録]
1919	04	01	「最近宗教心理学の傾向」	『密宗学報』70 [『挽近』再録]
1919	05	01	「最近宗教心理学の傾向」	『密宗学報』71 [『挽近』再録]
1919	07	08	『現代哲学に於ける科学と宗教』（エミル・ブートルー著 宇野円空共訳）	博文館
1920	05		学位論文『原始的神聖觀念（Primitive Sacredness）の研究』	学位論文
			序論 研究方法	
			第一章 宗教の本質としての神聖觀念	
			第二章 原始的神聖觀念の發生的根源	
			第三章 原始的神聖觀念の個体化	
			第四章 原始的神聖觀念の規範化	
			第五章 原始的神聖觀念の機能的特質	
			副論文『宗教と魔術』	
1922	07	08	『宗教史概論 上』（C.H. トーイ著 宇野円空共訳）	博文館
1924	02	28	「回教徒の復興精神」	『龍谷大学論叢』254
1924	04	01	「回教思想の特色」	『哲学研究』9/4

人 文 学 報

〈赤松智城著作目録〉(2)

年	月	日	著作名	発行
1924	11	01	「ハルナツクとトレールチ」	『宗教研究』新1/2 〔『晩近』再録〕
1925	03	30	■「第二輯の序に代へて」	赤松照懂『土曜講話第二輯』真宗徳華婦人会
1925	11	01	「書評：Gesammelte Schriften von Ernest Troeltsch. Verlag vor J. C. B. Mohr, Tuebingen 1912-1925」	『宗教研究』新2/6
1926	01	01	「回教と人種問題」	『中外日報』7892
1926	01	01	「近東に於ける回教民族の動乱に就いて(上)」	『宗教研究』新3/1
1926	03	01	「近東に於ける回教民族の動乱に就いて(中)」	『宗教研究』新3/2
1926	03	01	「古代文化民族に於けるマナの觀念に就て」	『民族』1/3 〔『晩近』再録〕
1926	05	01	「近東に於ける回教民族の動乱に就いて(下)」	『宗教研究』新3/3
1926	05	01	「古代文化民族に於けるマナの觀念に就て」	『民族』1/4 〔『晩近』再録〕
1926	06	17	■「言葉の神秘 赤松智城氏の講演」(上・中・下)	『中外日報』8031-8034
1926	07	01	「古代文化民族に於けるマナの觀念に就て」	『民族』1/5 〔『晩近』再録〕
1926	09	01	「古代文化民族に於けるマナの觀念に就て」	『民族』1/6 〔『晩近』再録〕
1926	11	01	「東西の神秘思想 (Rudolf Otto, West-Oestliche Mystik, Klotz, Gotha 1926)」	『宗教研究』新3/6
1927	03		『『原始文化叢書』趣意書』(赤松・宇野田空監修)	岡書院
1927	04	21	■『宗教学上より観たる真言密教の特質』	東寺降誕会本部
1927	08	15	「二種の神聖觀念」	『龍谷大学論叢』275
1927			「宗教哲学の黎明時代」	『宗教研究』新4/5
1928	06	10	「近東の古代宗教研究上の主要問題」	宗教研究会編『最近宗教研究思潮』 〔『宗教研究』特集〕
1929	03	13	『晩近宗教学説の研究』	同文館
1929	03	20	■『現代の宗教哲学』	玉川学園出版部**
1929			「回教思想」	『岩波講座世界思潮』6 岩波書店
1929			「北方民族の巫術の起源に就いて」[上]	『宗教研究』新6/3
1929			「北方民族の巫術の起源に就いて」[下]	『宗教研究』新6/5
1930	05	10	「宗教学の黎明時代」	東京帝国大学宗教学講座創設二十五年記念会編『宗教学論集』同文館
1930	09	05	「宗教現象学の対象に就いて」	京城帝国大学文学会編『哲学論集』 刀江書院
1930	11	25	「現代回教の危機」	『現代宗教批判』〔『宗教研究』臨時特集号〕
1931	04	30	■「萬新賽神の行事」	天野貞祐編集代表『朝永博士還暦記念 哲学論文集』岩波書店 〔『朝鮮』再録〕
1931	09	01	「朝鮮の聖樹」	『宗教学紀要』同文館〔東京帝国大学宗教学講座創設二十五年記念〕
1932	12	20	『宗教学方法論』	共立社〔現代史学大系5〕***
1933	11	11	「滿蒙に於ける宗教に就いて」	講演速記(於京城大学法文学部講堂)〔『朝鮮講演』32 〔刊年未詳〕〕
1933	12	10	「朝鮮巫俗の聖所」	日本宗教学会編『日本の宗教学』 大東出版社 〔『朝鮮』再録〕
1935	01	01	「朝鮮巫俗の神統」	『宗教研究』新12/1 〔『朝鮮』再録〕
1935	03	01	「朝鮮巫俗の神統」	『宗教研究』新12/2 〔『朝鮮』再録〕
1935	04	01	「滿州旗人の家祭」	『民族学研究』1/2 〔『滿蒙』再録〕
1935	09	01	「朝鮮巫俗の神統」	『宗教研究』新12/5 〔『朝鮮』再録〕
1936	01	01	「心田開発座談会」(他18名)(1935.11.27開催)	『朝鮮の教育研究』88

赤松智城論ノオト（菊地）

〈赤松智城著作目録〉（3）

年	月	日	著作名	発行
1936	01	25	「蒙古薩滿の行事」	『京城帝国大学創立十周年記念論文集 哲学篇』大阪屋号書店 [『京城帝国大学文学会論纂』4] [『滿蒙』再録]
1936	02	25	「朝鮮の仏教と民間信仰」	朝鮮総督府中樞院『心田開發に関する講演集』
1937	04	11	■『尚白齋詩集』（赤松智城編）	赤松智城
1937	06	20	『朝鮮巫俗の研究』上（秋葉隆共著）	大阪屋号書店
1937	07	15	「宗教と教育」（1936.08講演）	『光徳』51 [光徳寺大乘仏教研究会夏期講座]
1938	05	01	「朝鮮の巫経に就て」	『文献報国』4/5
1938	09	10	「赫哲族踏査報告」（泉靖一共著）	『民族学研究』4/3 [『滿蒙』再録]
1938	10	30	『朝鮮巫俗の研究』下（秋葉隆共著）	大阪屋号書店
			第一章 巫祖伝説（秋葉）	
			第二章 巫の呼称と種類（秋葉）	
			第三章 入巫過程（秋葉）	
			第四章 巫俗の神統と聖所（赤松）	
			第五章 薦新賽神の行事（赤松）	
			第六章 家祭の行事（秋葉）	
			第七章 村祭の行事（秋葉）	
			第八章 巫装と巫具（秋葉）	
			第九章 巫歌と巫経	
			第一節 巫歌（秋葉）	
			第二節 巫経（赤松）	
			第十章 巫の家庭生活（秋葉）	
			第十一章 巫の社会生活（秋葉）	
			第十二章 巫俗と道仏二教との関係（赤松）	
1938	10	30	『朝鮮巫俗参考図録』（秋葉隆共著）	大阪屋号書店****
1939	06		「現代蒙古青年の宗教意識」	『宗教研究』季刊 1/1 [『滿蒙』再録]
1939	11	15	「滿蒙の宗教に就いて」	『密教研究』71 [大陸密教研究] [『滿蒙』再録]
1940	10	05	「済州島俗信雑記」	『朝鮮民俗』3
1941	03	20	『滿蒙の民族と宗教』（秋葉隆共著）	大阪屋号書店
			第一 総説	
			一 北アジアの民族と文化（秋葉）	
			二 薩滿教の意義と起源（赤松）	
			三 滿蒙宗教の系統と類型（赤松）	
			第二 オロチョン族	
			一 大興安嶺オロチョン族踏査報告（秋葉）	
			二 オロチョン族踏査旅行記（秋葉）	
			第三 赫哲族	
			赫哲族踏査報告（赤松・泉）	
			第四 満洲族	
			一 満洲族踏査記（秋葉）	
			二 満洲族の家祭（秋葉）	
			三 満洲旗人の祭祀（赤松）	
			四 薩滿の祭祀と祝詞（赤松）	
			第五 蒙古族	
			一 内蒙古の宗教的年次行事（赤松）	

人 文 学 報

〈赤松智城著作目録〉(4)

年	月	日	著作名	発行
1941	03	20	二 鄂博と鄂博祭 (秋葉)	大阪屋号書店
			三 蒙古薩滿の行事 (赤松)	
			四 蒙古人の薩滿論 (赤松)	
			五 現代蒙古青年の宗教意識 (赤松)	
			六 蒙古族と漢文化 (秋葉)	
			七 喇嘛廟の行事 (赤松)	
			第六 漢民族	
			一 跳大仙踏査記 (赤松・秋葉)	
			二 踏単鼓と跳大神 (秋葉)	
			三 儒教と道仏二教 (赤松)	
			四 漢民族に於ける職業の貴賤 (秋葉)	
			第七 回教徒	
			満州国の回教 (赤松)	
			1941	
1942	07		「回教と近代思想」	『宗教研究』季刊4/2・3

[凡例] この目録の作成にあたっては、全京秀 [2005] 所収著作目録を参照した。ただし、赤松の著作でないものは除き、新たに確認された著作には著作名の冒頭に (■) を付した。論文の再録関係を示す際、『晩近宗教学説の研究』『朝鮮巫俗の研究』『満蒙の民族と宗教』はそれぞれ『晩近』『朝鮮』『満蒙』と省略した。

* 著者肩書き「文学士」から1910年以降、龍谷大学付属図書館所蔵本の所持者の書き込みが「大正三年」とあることから1914年以前の著作と考えられる。

** 玉川学園出版部版のほか、イデア書房版、各章の抜刷状の版がある。

*** 尾佐竹猛『近世日本の国際観念の発達』との合本版と赤松単著版とがある。

**** 『朝鮮巫俗の研究』下の図版のみを収録したもの。

赤松智城論ノオト（菊地）

〈赤松智城満蒙調査行程表（1933-38）〉（1）

1933	09	昭和8年度研究旅行（1933.09.06-10.04 29日間）「実地踏査ノタメ今回ハ先ズ鐵路沿線ヲ主トシテ研究旅行ヲ試ミタリ」	
		06 京城発	
		07 奉天着，満鉄図書館訪問	
		08 満州国立図書館及故宮博物館訪問，午後城内ニテ王大仙（巫医）ノ行事ヲ見学ス	
		09 東西南北ノ清真寺訪問，故宮博物館ニテ清朝薩滿教ノ祭具ヲ撮影シ，午後旗人ノ邸宅ヲ調査ス	
		10 早朝大連着，龍王廟，松山寺，娘々廟，紅社会，清真寺等見学	
		11 早朝金州ニ至リ南金書院ヲ訪ヒ，靈星廟，城隍廟，財神廟，真武廟，天后宮，土地祠，天齋廟，藥王廟，等ノ諸廟ヲ調査シ，午後郊外三壘庄ニ至リ，小廟二三ヲ見，城内ノ韓大仙（巫医）ヲ訪ヒ行事ヲ調査シテ大連ニ帰ル	
		12 満州文化協会及満鉄図書館ヲ訪問シ，午後文化協会ニ沙河口郊外ニ住ム薩滿ヲ招イテ行事ヲ調査ス	
		13 大連発，大石橋ニ至リ郊外迷鎮山ニ登リ，有名ナル娘々廟ノ三殿ヲ見学シ，帰途清真寺ヲ訪フ	
		14 湯崗子ノ娘々廟，関帝廟見学，午後遼陽ニ至リ，天齋宮，金銀庫，清真寺，関帝廟及白塔ヲ歴訪ス	
		15 奉天經由，新京着	
		16 文教部訪問，清真寺，関帝廟，城隍廟，胡仙堂，財神廟，火神廟ヲ調査ス	
		17 新京発，ハルピン着	
		18 東方文物博物館ヲ訪ヒ，極樂寺，猶太教会堂（シナゴーク）及回教会堂（モスク）見学，韃靼系回教徒ヲ訪問ス	
		19 早朝ハルピン発，松花江ヲ渡ツテ北上シ，海倫ニ到着	
		20 雨中，城隍廟，龍王廟，三蟲廟，孟母廟，清真寺，関岳廟，娘々廟，胡仙堂ヲ歴訪シ，大仙（巫医）ノ行事ヲ見ル	
		21 北安，克山經由，チハハル着	
		22 旗務處，旗人及打虎力ノ家屋，蒙旗学校及清真寺ヲ歴訪シ，大仙ノ行事ヲ見学ス	
		23 三教寺，天齋廟，孟母廟，胡仙堂，財神廟，回教墓地，関帝廟，城隍廟，清真寺及其学校旗人ノ邸宅ヲ調査ス	
		24 チハハル発 洮南着	
		25 関帝廟，清真寺，天恩地局（蒙古王府），龍王廟及サチガイモト（神樹）ヲ見学	
		26 鄭家屯着，郊外ノ鄂博山ニ登リ，鄂博ヲ調査ス	
		27 四平衢，新京經由，吉林着	
		28 早朝文廟ニ於ケル積奠ニ参列シ，関帝廟，北山ノ諸廟及東西清真寺ヲ調査ス	
		29 関帝廟及江神廟訪問，旗人ノ邸宅ヲ調査シ午後郊外ノ小白山ニ登リ望祭殿ヲ見学，薄暮，李大仙（巫医）ノ行事ヲ見ル	
		30 松花江ヲ渡ツテ龍潭山ニ登リ，山腹ノ諸廟ヲ見学シテ，午後新京着	
		10	01 新京発，奉天着
			02 満州国立図書館ヲ訪問シ，城外ニ於テ薩滿ノ行事ヲ見学調査ス
			03 奉天発
			04 京城帰着
1934	05	昭和9年度第1回研究旅行（1934.05.27-06.08 13日間）	
		27 京城発	
		28 奉天着	
		29 湯崗子娘々廟調査ニ引続キ大石橋迷鎮山娘々廟会熊岳城内道休寺，火神廟見学。	
		30 大石橋迷鎮山娘々廟會調査，祭礼ノ光景ヲ活動写真ニ収ム。	
		31 大連近郊黒岩礁ノ諸小廟調査ニ引続キ，大連松山寺及后宮見学。	
06	01 奉天満州医科大学校庭ニ於テ薩滿ノ単鼓神祭ヲ举行シ之ヲ活動写真ニ収メテ調査ヲ行フ。		

人 文 学 報

〈赤松智城滿蒙調査行程表（1933-38）〉（2）

1934	06	02	清真寺調査。
		03	新京滞在。
		04	敦化ニ至リ聖宗廟及清真寺ヲ調査ス。
		05	敦化ニ於テ東西関帝廟、尼姑ノ娘々廟ヲ調査ノ上、延吉ニ向フ。
		06	延吉ニ於テ娘々廟、清真寺、関帝廟及郊外ノ小廟ヲ歴訪シ、巫医ノ家ヲ訪ツテ行事ヲ見学ス。
		07	龍井村ノ見学ノ上、上三峰ヲ経テ帰途ニ着ク。
		08	京城帰着。
		1935	02
03	京城発		
04	奉天着、民間除夜ノ行事ヲ見学ス。		
05	元旦ノ行事見学ノ上、タートル氏族回教大会ニ出席ス。		
06	小東門外ノ巫医ヲ調査ス。		
07	皇寺、太平寺ヲ見学シ、打鬼ノ仮面ヲ撮影ス。		
08	満州旗人午氏ヲ訪問シテ家系ノ調査ヲ行ヒ、清奠各寺ヲ歴訪シ、博物館ヲ見学ス。		
09	満州医科大学ニ於テブリヤート族ノ学生ニ就キノ民族ヲ調査ス。		
10	民俗参考品蒐集ノタメ城内ニ至リ、更ニブリヤート学生ニ就イテ其民俗調査ヲ行フ。		
1935	08		
23		京城出発	
24		奉天着、国立博物館見学	
25		奉天発、鐵嶺ノ諸廟及清真寺調査ノ上新京着	
26		新京発、ハルピン着	
27		ハルピン極楽寺及近郊調査	
28		ハルピン発	
29		海拉爾着	
30		海拉爾郊外南屯ニ於テ素倫春ヲ調査ス	
31		海拉爾郊外アンパンノールニテブリヤート族西屯ニテ達呼爾族ヲ調査ス	
09		01	甘珠爾廟ニ至リ蒙古定期市ヲ調査ス
02		同上、海拉爾ニ帰ル	
03		西屯達呼爾人巫家ヲ訪問シ行事ヲ見学ス	
04		海拉爾発 満州里着	
05		満州里発 博克図着	
06		博克図特務機関ヲ訪問シ、オロチヨン族ニ関スル調査ヲナス、	
07		午前中、達呼爾族巫術調査、午後、赤松ハ札蘭屯ニ行キ、秋葉ハ興安山中ニ向フ	
08	赤松ハ札蘭屯調査、秋葉ハ興安山中オロチヨンキャンプニ到着、		
09	赤松ハ齋々哈爾近郊ノ達呼爾及満州旗人ヲ調査ス、秋葉ハ博克図ニ帰着、齋々哈爾ニ向フ。		
10	齋々哈爾発 北安着		
11	北安発 大黒河着		
12	瓊瑋郊外黄旗營屯■■■満州旗人屯落ヲ調査ス		
13	大黒河発 北安着		
14	北安発 ハルピン着		
15	ハルピン発 新京着		
16	新京発 奉天着		
17	京城帰着		

赤松智城論ノオト（菊地）

〈赤松智城満蒙調査行程表（1933-38）〉（3）

1936	02	昭和10年度第2回研究旅行（赤松1936.02.23-03.03 10日間）（秋葉1936.02.16-24 9日間）
		16（秋葉）京城発
		17（秋葉）奉天着
		18（秋葉）二十三日迄満鉄図書館ニ於テオロチヨン族ニ関スル文献ヲ調査ス
		22 奉天発，新京着
		23（赤松）京城発（秋葉）奉天発
		24（赤松）奉天着，満鉄図書館及医科大学訪覧（秋葉）京城着
		25 満鉄図書館，清真寺歴訪調査
		26 満鉄図書館ニテ調査
		27 国立図書館ニテ調査，清真寺ヲ訪問
		29 文教部民政部歴訪，清真寺調査
1936	03	01 新京発，奉天着，満州旗人調査
		02 奉天発
		03 京城帰着
1936	09	昭和11年度第1回研究旅行（東部内蒙古）（1936.09.10-27 18日間）
		10 京城出発
		11 奉天着，同夜七時奉天発，白城子ニ向フ途中鉄嶺付近ニ於テ匪賊ノ列車襲撃ニ逢ヒシモ幸ニシテ無難ニ通過ス
		12 朝八時白城子着，湯玉麟旧邸，市場，清真寺等ヲ歴訪シ，同夜王爺廟特務機関長泉鐵翁少佐ニ面会，内蒙古踏査ノ打合ヲ行フ。
		13 早朝蒙古兵ノ屯所ヲ見学，九時白城子発正午王爺廟着。
		14 早朝特務機関ニ伊藤少尉ヲ訪問シ入蒙手續ヲ行ヒ，日本憲兵隊ヲ訪問ノ後，午後王爺廟ヲ出発，四時索倫到着，守備隊長野田大尉ヲ訪ヒ調査ノ準備ヲスル。
		15 朝九時索倫発，午後二時南興安着，トラックニテ護衛兵ト共ニ興安嶺ヲ越エテハロンアルシャンニ至ル。
		16 午前中蒙古警士ノ案内ニヨリ蒙古包ノ調査ヲ行ヒ午後ハ温泉地帯及山上ノ鄂博（オボ）ヲ踏査ス。同夜ダホール警士ニツイテ質問調査ヲナス。
		17 午前中蒙古警士四名ニツキ質問ヲ行ヒ，正午ハロンアルシャンヲ出発，興安嶺ヲ越エテ午後一時南興安ニ到着ス。
		18 早朝六時南興安発，十一時索倫着，満州事変記念祭ニ列席ス。
		19 午前九時，軍部警察ノ護衛案内ニヨリ一行十五名トラックニテ索倫ノ西南十余里ノ蒙古人部落満洲屯ニ至リ，終日踏査ノ上蒙古包ニ宿泊ス。
		20 朝八時出発，途中雨ニ逢ヒ成吉思汗長柵ヲ見学シテ十時索倫ニ帰着，十一時索倫発，午後三時王爺廟ニ到着ス。
		21 興安軍官学校ヲ訪問シテ，蒙古学生三百余名ニツイテ質問紙方ニヨリテ調査ヲ行ヒ，同夜蒙古各部族生徒代表ト会談調査ヲナス。
		22 再ビ軍官学校ニ至リ質問紙法ヲ続行シ，午後ハ王爺廟北郊ノ蒙古部落他斯拉海屯ヲ踏査シ，帰途王爺廟及ヒ鄂博ノ調査ヲ行フ，同夜生徒代表ト座談会ヲ催ス。
		23 早朝特務機関ヲ訪問シ，蒙古学生ノ案内ニヨリ葛根廟ニ至リ，終日調査ヲ行ヒ，午後白城子ニ至ル。
		24 朝九時白城子発，大賚，前郭旗，農安ヲ経テ午後九時新京着。
		25 午後二時新京発，五時奉天着。
26 満州医大及皇寺ヲ訪問ノ後，正午奉天発五龍背ニ下車シ，午後八時半出発。		
27 朝十時半京城帰着		
1937	02	昭和11年度第2回研究旅行（南滿）（1937.02.22-03.03 10日間）
		22 夜京城発。
		23 奉天着，満州医大ヲ訪問ス。

人 文 学 報

〈赤松智城滿蒙調査行程表（1933-38）〉（4）

1937	02	24	皇寺ニ至リ喇嘛廟跳步舞踏ヲ見学ス。
		25	同前，午后城内ニ赴キ元宵節ノ行事ヲ見学ス。
		26	滿州医大及滿鉄図書館ヲ訪問シ，午后二時奉天発，八時大連ニ到着ス。
		27	滿鉄本社及図書館ヲ訪問ス，午后六時大連発，七時金州着。
		28	午前中金州郊外蘇家屯会毛墜子部落ノ調査ヲ行ヒ，午后金州城内大仙ノ家ヲ訪ヒ，行事ヲ見学ス。
		03	01
02	南滿中学堂ニ安藤校長ヲ訪問シ，全校生徒ニツイテ質問紙法ニヨル調査ヲ行ヒ，午后二時奉天発。		
03	京城帰着		
1937	08	08	昭和12年度第1回研究旅行（東部滿州）（1937.08.28-09.17 21日間）
		28	京城出発
		29	午後五時奉天着，助手泉靖一参加ス。
		30	午前ヨリ滿州医科大学，滿鉄図書館，南滿中学堂，奉天中学校，滿鉄教育研究所ヲ歴訪ス，午後新京ニ向ヒ六時半新京着。
		31	午前滿州国政府治安部ニ行キ松花江下流域調査旅行ノ打合せヲナス，午後民生部ニ行キ更ニ滿州国紅卍会總會ヲ訪ヒテ後，孝子墳ニ赴キ神樹及王夢惺孝子之墓ヲ調査撮影ス，夕刻出發午後，十時半哈爾濱着。
	09	01	午前鉄路総局ヲ訪ヒ，周局長其他ノ要人ヨリ松花江下流域ノ情勢ヲ聴取シ打合せヲ行フ。次デ松花江岸ノ碇泊司令部ニ澤内中佐ヲ訪ヒ乗船及調査上ノ便宜ヲ依頼シ快諾ヲ得タリ。午後博物館ヲ見学シ，ボンソフ其他館員諸氏ト共ニ滿州民俗ニ就テ会談ス。
		02	午前九時半乗車シ一時間余ニテ阿城駅着先ヅ日本軍守備隊ヲ訪ヒ，護衛兵数名ト師範学校教諭岡田氏及日系警官松島氏等ト共ニ阿城縣城ノ調査ニ赴ク。縣公署ニテ参事官宇都宮氏ヨリ阿城縣ノ情勢ヲ聴取シ種々ノ資料ヲ与ヘラル。縣公署ヲ辞シテ清真寺ニ赴ク途中偶然漢人ノ結婚式ニ会ヒ，ソノ状況ヲ見学シ撮影ス。次デ回教ノ女学校ヲ訪ヒ，女先生及女生徒ト会談シテ後，壯麗ナル清真寺ニ詣リ大殿及沐浴処等ヲ見学ス。更ニ轉ジテ滿蒙学校ニ行キ，滿州旗人ノ教育状況ヲ聴取シ，次デ滿州旗人中ノ名家関恩魁氏邸ヲ訪ヒ，ソノ家系，家族，家屋，家祭等ヲ精査シ，黄昏ニ及ブ。ヤガテ急ギ白城址ノ一部ヲ見学シ，七時駅站ニ帰リテ乗車シ八時哈爾濱着。
		03	九時博物館ニ行キルカシキン氏ト会談シ，次デ滿鉄図書館ヲ訪ヒテ後，碇泊司令部ニ赴キ軍ノランチニ便乗シテ碼頭ノ哈爾濱丸ニ乗船シ，十一時出發，愈々松花江ヲ下ル，江上ニ堂々タル滿州国江防艦隊ノ横ハレルヲ見ル，洋々ナル大江ト江岸ノ景觀ヲ展望シツゝ幾多ノ寄港地ヲ經テ下江シ夜ニ入ル，
		04	午前十時依蘭ニ上陸シ縣城ニ赴ク，一憩後〇〇部隊長ヲ訪ヒ，附近ノ情勢ヲ聴取シ，次デ縣公署ニ行キ調査ノ手配ヲ了ス。午後警官通訳諸氏ノ東道ノ下，先ヅ南関臺廟ニ詣ス。此廟ハ実ハ仏寺ニシテソノ境内ノ楡ノ神樹アリ。次ニ清真寺ニ至リ，大殿内ニテ回教特有ノ棺槨ヲ見，沐浴処ニテ小沐浴ノ姿態ヲ撮影ス，轉ジテ滿州旗人ノ一家郎恩貴邸ヲ訪ヒ家族状態及家祭等ヲ調査ス。次デ大仙ノ一老巫女ヲ訪ヒ仕事ヲ詳細ニ見学シ巫女及巫具等ヲ撮影ス。薄暮帰宿。
		05	午前十時半海星丸ニ乗船シテ下江シ午後七時佳木斯着。
		06	朝三省警務庁長海野氏ヲ訪ヒ，次デ縣公署参事官川瀨氏ヲ訪ヒ赫哲族調査ヲ打合せ，陳局長ヨリ赫哲族ヲ聴取シ，愈々蘇々屯ノ同族踏査ヲ実施スルコトニ決ス。清真寺ニ詣シ會長趙福先氏及其妻下釜もと女史ト会談ス，次ニ関帝廟，呂祖廟，滿州旗人周氏及大仙兩家ヲ訪ヒシモ大仙ハ不在ノタメ調査スルコト能ハズ。夕刻塙部隊長ヲ訪ヒテ帰宿ス。午後九時碼頭ヨリ乗船シテ川瀨氏及王通訳ト共ニ下江シ，午後十二時樺川（悦來鎮）着。黒■■夜半ノ嚴重ナル警戒裡ニ五清里ヲ進ミ樺川城内春記糧棧ニ宿泊ス。
		07	午前九時一行ハ滿人警察官三十余名ニ護衛サンテ郊外ニ出デ西南里余ニシテ蘇々屯部落ニ着シ，赫哲族調査ヲ行フ。四時驟雨ヲ衝イテ帰宿。晩食後大仙春鳳山（四四）ヲ訪ヒ行事ヲ見学ス。九時半夜闌ノ街道ヲ碼頭ニ走リテ紀賢丸ニ乗船佳木斯ニ向フテ溯江ス。

赤松智城論ノオト（菊地）

〈赤松智城滿蒙調査行程表（1933-38）〉（5）

1937	09	08	午前五時佳木斯着、一旦帰宿シ、八時半佳木斯発車、日本移民部落ヲ車上ニ眺メ、東滿ノ山野ヲ走りテ九時牡丹江着。		
		09	午前牡丹江市ヲ視察シ、省公署ヲ訪フ。十一時出発、十一時半寧安着、縣公署ニ行キ情勢ヲ聴取ス。通訳警官ト共ニ、西閣、清真寺、滿州旗人伊氏邸ヲ歴訪シ四時乗車、六時東京城着、蓬萊氏ニ迎ヘラレ城内ニカエリ宿泊ス。		
		10	午前九時警察署ヘ赴キ状況ヲ聴取シ、城外西方ニ里余ノ一部落下村ノ滿州族調査ニ向フコトニ決シ十時大車ニ乗リテ警官蓬萊氏及勵氏ト共ニ出発ス。途中清真寺ヲ見学シ、小廟ヲ調査シ、阿■ニテ牡丹江ヲ渡リ、岩盤上ヲ進ミ偶々野棺ノ横ハルヲ見ル。一時過下村着。部落ノ状況及蘆溝ノ行事巫具等ヲ調査ス。四時帰路ニ就キ六時帰宿。		
		11	午前東京城跡及五鳳樓ヲ見学シ、転ジテ南大廟ニ詣ス、寄宿後勵氏ヨリ旗人ノ行事次第等ヲ聴取ス。十二時半東京城站出発。間島省ノ山河ヲ車上ニ展望シテ五時凶們着、凶們江ヲ渡リ南陽ヲ経テ十時羅津着。		
		12	午前中羅津ヲ視察シ乗合自動車ニテ午後二時清洋ニ着シ更ニ朱乙行ニ乗換ヘテタ刻朱乙着。		
		13	微恙ノ為ニ朱乙ニテ休泊ス。		
		14	午前九時朱乙発車咸興ニ向ヒ七時半着。		
		15	午前赴戦高原ニ向ヒ火田民ヲ調査シ、赴戦山莊ニ宿泊ス。		
		16	午前火田民ノ廢屋ニテ民俗品等ヲ採集シ十時半出発、咸興ニ向ヒ午後八時咸興出発、夜行ニテ京城ニ向フ。		
		17	午前六時半京城着		
		1938	06		昭和13年度研究旅行（熱河地方 1938.06.23-07.04 12日間）
				23	京城発 奉天ニ向フ。
				24	午後二時半奉天着、滿鉄奉天図書館、鉄路総局ヲ訪問シ、同夜半奉天線ニヨツテ錦縣ニ向フ。
				25	午前八時錦縣発、午後七時承德着。
				26	午前中承德憲兵隊、陸軍司令部及陸軍病院ヲ訪問、午後喇嘛廟、雜宮及清真寺ヲ見学ス。
				27	午前十時承德発、午後十一時錦縣着。
				28	錦縣濟寺白塔及諸廟ヲ見学シ、午前十一時錦縣発、午後十一時四十分北京着。
29	北京市公署社会局ヲ訪問シテ社会事業ニ関スル調査ヲ行フ。				
30	午前中太廟ヲ見学シ、午後、蘆溝橋、宛平■城、廣安門等ノ戦跡ヲ一見シタル後、外城牛街ノ東西清真寺ヲ訪問ス。				
07	01			滿鉄北支事務局、高等警官学校ヲ訪問シタル後、通州ノ戦跡ヲ弔ヒ、文廟及燃燈仏金利塔ヲ見学シテ北京ニ引返シ、隆福寺ノ書肆ヲ訪フ。	
02	午前七時二十分北京発、九時天津着、南華大学ノ跡日本図書館等ヲ見学シ、同夜天津発奉天ニ向フ。				
03	正午過奉天着、東陵ヲ見学ノ上、同夜奉天発京城ニ向フ。				
04	午後二時四十分京城帰着。				

* 本表は、外務省外交史料館所蔵文書「滿蒙ニ於ケル民俗及宗教ノ研究事業助成 赤松智城 秋葉隆 自昭和八年四月 至昭和十二年十二月」（「外務省記録 H門 東方文化事業 6類 講演、視察及助成 研究助成関係雜件 第八卷」レファレンスコード B 05015882700、B 05015882800）所収の各年度研究経過報告より作成した。事項覽は当該文書より抜粋したが、旧漢字は新漢字に改め、句読点を適宜補い、また、判読不能の文字は■で表記した。